遠い町へ

白波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遠い町へ

【Ｎコード】
Ｎ０５５７Ｕ

【作者名】
白波

【あらすじ】
ある出来事がきっかけで組織にコナンと哀の正体がばれてしまう。
その組織との対決を終えそれぞれ自分達の気持ちに気づいたコナンと哀は元の体に戻らず、阿笠博士とともに米花町を離れ別の場所で暮らすことを決断する。
カップリングはコ哀でオリキャラがたくさんでます。

プロローグ（前書き）

はじめまして白波です。
はじめての投稿なので読みづらいかもしれませんがよろしくお願いします。

プロローグ

俺は高校生探偵工藤新一。
幼なじみで同級生の毛利蘭と遊園地に遊びに行き黒ずくめの男たちの怪しげな取引を目撃し毒薬を飲まされ体が縮んで江戸川コナンになってからから1年がたち俺は小学2年生になりまた夏休みを迎えた。

俺は帝丹小に通い同級生の円谷光彦、吉田歩美、小嶋元太、そして組織の元科学者で俺と同じ薬も飲んで体が縮んでしまった灰原哀とともに少年探偵団を結成している。

そして今組織との最後の対決が静かに、しかし、確実に始まろうとしていた。

今止まっていた歯車が動き出す！

プロローグ（後書き）

いかがだったでしょうか？

少し読みづらい部分もあったかと思いますが、読んでいただきありがとうございます。のんびりとマイペースでやっていくので不定期の投稿となると思いますがよろしくお願いします。

第1話山道で見たもの（前書き）

半分以上会話です。

第1話山道で見たもの

ある晴れた日曜日俺たち少年探偵団は阿笠博士とともにキャンプにいくことになった。

「行ってきまーす。」

俺はいつも通り父親が探偵で幼なじみの蘭の家を後にし、阿笠博士や光彦、歩美、元太、灰原とともに博士の黄色いビートルに乗ってキャンプ場へと向かった。

キャンプ場に着くと、俺と光彦、元太は、薪を拾いに行き、歩美と灰原は博士と夕食の準備をすることになった。

光彦や元太と別れて薪を拾っていると、ふと見た山道に見覚えのある黒い車が止まっていた。

少し経つと全身黒ずくめの男が2人歩いてきた。一人は銀色の長髪もう一人は、ずんぐりとした体形でサングラスをかけている。

それはまぎれもなく新一に薬を飲ませたジンとウォッカであった。

（あいつらこんなところでなにをやっているんだ。）

とコナンが考えていると、二人の会話が聞こえてきた、

「ウォッカこの写真を見ろ。」

「このガキどもがどうかしたんですかい？」

「この写真に写っている茶髪の灰原哀とかいうガキ…。シェリーに似てないか。」

ジンが指差したところを見てウォッカは、

「兄貴この写真に写っているのはどう見てもガキですぜ。」

「よく考えてみろシェリーはあの子供一人がやっとぬけられるような大きさのダストシュートから脱出したんだ。もしかしたらなんらかの方法でシェリーはガキの姿になってると考えれば今までシェリ

ーが見つからなかったのも説明がつく。」
「それじゃぁ、兄貴いますぐこのガキを探しに…」
「その必要はない。」
「なぜですかい？」
「今シェリーは少年探偵団とかいうガキどもや阿笠とかいうじいさんと一緒にこの近くのキャンプ場に来ている。」
ジンのその言葉を聞いた瞬間コナンは急いでキャンプ場へと引き返した。薪を拾いに行った元太や光彦のことも心配だったが探偵バッジは先日から修理中である。
（くそっ！！何でこういう時に限って探偵バッジが修理中なんだよ。）
と思いながらコナンは、キャンプ場に向かって走っていった。

第1話山道で見たもの（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからものんびりと続けていきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

第2話キャンプ場での戦い（前書き）

展開が急なので読みにくいかもしれませんがお願いします。

第2話キャンプ場での戦い

工藤君や円谷君、小嶋君が薪を拾いに行ってからしばらくたち私と吉田さんは二人でカレーに入れる野菜を切っていた。
「哀ちゃん上手だね…。」
「ありがとう。ねぇ吉田さんあっちにあるにんじんとってきてくれない？」
「わかった！！」
と元気よく言うとあゆみはテントのほうに駆けて行った。
（ほんとただの子供はいいわね…。それにひきかえ私は…。）
そんなことを考えていると
「久しぶりだなシェリー…。いや今は灰原哀だったかな？」
突然後ろからいわれ振り向くとそこには、ジンとウォッカが立っていた。
「写真だけでは少しうたがったがまさか本当にガキの姿になっているとわな…。」
と言ってジンは拳銃を構えたその瞬間
「はいばらーーー！」
と大声で言いながら林の中からコナンがかけてきた
「く、工藤君！？」
と灰原が言うと
「工藤？そうか…。お前があの時の高校生探偵の工藤新一か…。お前も生きていたとわな…。」
と言うと銃口をコナンのほうに向け引き金を引いた。
「工藤君危ない！！」
という声とともにコナンは灰原にはね飛ばされた
コナンに向かって飛んでいた銃弾は灰原の脇腹に当たった。
「灰原！！」
コナンが起き上がり灰原のもとに駆け寄ろうとした時

「ＦＢＩよ。武器を地面に置きなさい！！」
「ジョディー先生！」
「かんねんするんだなジン…。お前らの組織の本部は先ほど日本の警察とわれわれＦＢＩの手によって壊滅した。」
するとジンは赤井をにらむと灰原の方に銃口を向けたしかし、その直後ジンは崩れ落ちた。
赤井がジンを撃ったのだ。
数分後救急車で灰原は病院へ搬送された。

第2話キャンプ場での戦い（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。
なんだかあっさり決着がついてしまってすいません。
なぜこのような決着になったかという理由は次回ジョディ先生とコナン君との会話で説明するつもりです。
これからもよろしくお願いいたします。

第3話病院での会話（前書き）

前回より少し長いです。

第3話病院での会話

ここは、とある山奥にある病院の応接室。
普段、来客者が医院長などと話す時などに使われる部屋だ。
今そこにはコナンとジョディがいた。灰原は先ほど手術が終わり病室にいる。幸いけがは思ったより軽かったので、2週間ほどで退院できるそうだ。
「ねぇ、ジョディ先生組織が壊滅しったて本当？」
「本部は潰から大丈夫だと思うけど…。組織は私たちが突入した後組織の人間がデータを消してしまったから、完全になくなったとは言い切れないわ…。言まだ組織の残党が潜んでないとも言い切れないし…。でもここの病院は我々ＦＢＩと日本の警察が警備をきちんと固めているから安全よ。」
「ジョディ先生。」
「何かしら？クールキッド。」
「何で組織の本部が見つかったて教えてくれなっかたの？」
コナンがそう言われジョディが少し困った様子でいると
「これ以上坊やのような一般市民を巻き込みたくなかったんだ。」
「赤井さん！！」
「悪いが部屋の外で少々聞かせてもらった…。坊やのことだからこのことを言うとおそらく何が何でもついていくだろう。あの茶髪の子もな…。そうなればまた君たちを危険なことに巻き込むことになる…。」
「でも…。」
「秀の言う通りよ。それともあなた達が行かなきゃいけない理由があるの？」
「それは…。」
本当のことを言うわけにはいかないのでコナンは言葉に詰まってしまった。

「じゃあ、私たちはいくわね。」
と言うとジョディと赤井は部屋を出て行ってしまった。
二人が部屋を出てしばらくするとコナンは灰原の病室に向かった。
ドアをノックすると
「どうぞ。」
と返事が返ってきたので中に入った。
警備が固くコナンや阿笠博士しか訪れないためか病室の中はあまり物が置かれていない。
「阿笠博士は？」
「博士ならいま家に着替えを取りに行ってるわ…。」
「そうか。」
というとコナンは椅子に座った。
「その顔を見るとＦＢＩからあまりいい返事もらえなかったようね。」
「あぁ。本当のこと話すわけにもいかないからな…。」
「そうね…。」
と言い灰原は窓のほうを見た。

第3話病院での会話（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。

少しジョディ先生とコナン君だけではきつくなったので赤井さんにも登場してもらいました。

今後もマイペースで続けていきたいと思うのでよろしくお願いします。

第４話コナンの告白（前書き）

少々無理があるので読みづらいかもしれません…。

第4話コナンの告白

今、この病室には灰原とコナンしかいない。灰原は窓のほうを見たまま
「ねぇ。工藤君…。」
「なんだよ。」
とコナンが答えると灰原はコナンのほうを向き
「私たちいつまで同級生やってるのかしら…。」
と言った。コナンは少し間を置くと
「なぁ、灰原…。」
「なに？」
「いっそこのまま解毒剤のことあきらめて俺とお前と阿笠博士の三人で米花町離れてどこか別のところで暮らさないか？」
「突然何を言い出すのよ…。あなたらしくもない…。」
「お前のことが心配だからだ…。薬のデータがなくなった今、もし、完璧な解毒剤を作ろうとすればかなりの時間がかかる…。それにこれ以上お前に無理させたくないんだよ…。」
「仮に解毒剤をあきらめるとしても米花町を離れることはないんじゃないの…。」
「俺の体はどんどんあのころの工藤新一の体に近づいて行っている…。そうすればおそらくごまかしきれなくなる…そうならば…。」
灰原は自分の足元の方を見るとベットのシーツをつかみながら
「…なんで、なんでなのよ…。私が作った薬のせいでこんなことになってしまったのに…。どうしてそんなに優しくしてくれるのよ…。」
「お前のことが好きだからだ…。」
「何言ってるのよ…。あなた私のこと恨んでるんじゃないの？」
「確かに最初はお前のこと恨んでいた…。だけど、今は違う！今お前は俺の大事な相棒だ…。お前がいないとダメなんだよ…。いつも

一人で抱え込んでたとえ苦しくても悲しくてもそれをほとんど表に出さないお前を守ってやりたいんだよ…。」

灰原はふたたび窓のの方を向くと

「少し考えさせて…。」

と言った。

「わかった。」

と言うとコナンは灰原の病室を後にした。

第４話コナンの告白（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。

少々無理があって読みづらくてすいません…。

これからも続けていきたいのでよろしくお願いします。

第5話灰原の想い（前書き）

今回は基本的に灰原の目線で書いています。

第5話灰原の想い

工藤君が出て行った後の病室私は一人昔のことを思い出していた。

組織にいた時の事

姉の事

１０億円強奪事件の事

工藤君と初めて会った時の事

広田教授が殺害された事件の事

少年探偵団の仲間たちの事

バスジャック事件の事

ツインタワーの事件の事

杯戸シティーホテルの事

いつからかわからないが工藤君はいつの間にか興味深い個体から恋愛の対象になっていた。

そういう対象として見ていないといつか吉田さんに言ったことがあった。

（私どうしたらいいのかな…お姉ちゃん…。）

そんなことを考えながら私が窓の方を向くと

コンコンとドアをノックする音が聞こえた。
「どうぞ」
と答えると阿笠博士と有希子さんが着替えなどの荷物を抱えて入って来た
「哀ちゃん、調子はどう？」
「えぇ大丈夫よ。」
「ところで新ちゃんはここにはいないの？」
「工藤君ならさっきまでここにいましたけど…。」
「そう…。」
「有希子さん少しいいですか？」
「なーに哀ちゃん？」
「あと博士少し席を外してもらえるかしら？」
と私が言うと博士は席をはずし私は先ほどの工藤君とのやり取りを有希子さんに話した。工藤君に対する思いも。
「私幸せになっていいのかな？私が作った薬のせいでたくさんの人が苦しんでいるのに…。工藤君も、有希子さんも、博士も、それに蘭さんも…。」
「いいんじゃないの？」
「えっ！？」
「この世に幸せになってはいけない人間なんていないわ…。それにあなたなら新ちゃんの相手として大歓迎よ。」
「でも…。私…。」
「過去がどうとかそういうのはいいのよ…。あなた新ちゃんとは相性がピッタリだっていうし、それにあなたのことが嫌いならわざわざこんなところ間で見舞いに来ないわよ。」
「…。」
「それにあなた達が望むなら新しい家の確保もどうにかするわ。」
「そこまでしていただかなくても…。私のせいでこんなことになっているのに…。」
「もっと自信を持ちなさい！私のせいでとかそういうこといわない

の！」
「…。」
「とにかく自分の気持ちに素直に従ってみたいいんじゃない？新しい家の話決まったら相談してね。」
そう言うと有希子さんは病室を出て行った。

第5話灰原の想い（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第6話灰原の告白（前書き）

今回はやや短くなってしまいました…。

第6話灰原の告白

有希子さんが病室を出て少し経つと工藤君がやってきた。
「よっ！灰原調子はどうだ？」
とコナンが聞くと灰原は
「えぇ。悪くはないわ…。」
と言うと少し頬を赤らめながら
「工藤君その…。さっきの話なんだけど…。少し考えてみて…。私も工藤君のことが好きなの…。こんな私でよかったら…。」
「いいのか！灰原！」
「えぇ。そうそう新しい家の件だけど、有希子さんがどうにかしてくれるそうよ…。」
「母さん来てるのか！」
「えぇ。さっきまでそこにいたわよ。会ってないの？」
と灰原が言うとちょうど
「哀ちゃんはいるわよー。」
と言いながら有希子が入ってきた
「それにしてもよかったじゃないの。ＯＫしてもらえて！」
「聞いてたのかよ！」
とコナンが言うと
「盗み聞きするつもりはなかったんだけど、二人に話があってきたら聞こえてきたのよ。」
「話ってなんですか？」
と灰原が聞くと
「それがねぇさっき友達から電話がきて仕事の都合で今度引っ越すから家を引き取ってくれる人を探してるっていう電話があったのよ。それでどうかなって？」
「どんなところなんだ？」
とコナンが聞くと有希子は

「島の名前は忘れたけどその島のはずれの方にある洋館よ。今度写真持ってくるわね。」
と言うと有希子は
「とりあえず阿笠博士と相談してみたら？」
「そーだな。」
と言うとコナンは病室を出て行った。
コナンが出ていくと有希子はコナンが座っていた椅子に座って
「哀ちゃん、これからも新ちゃんのことよろしくね。」
と言うと灰原は
「はい。」
と笑顔で答えた。

第6話灰原の告白（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。

かなり急な展開ですいません…。

これからもよろしくお願いいたします。

第7話別れの時

灰原が退院して1週間。
今日は米花町を離れる日だ。
あの後博士に二人が付き合うことにしたことと米花町を離れることにしたと告げた。
コナンと灰原が付き合うことは歓迎したが、米花町を離れることにはなかなか納得しなっかた。
「哀君本当にこれでいいのか。」
いつも通り学校に行こうとする灰原に阿笠博士が声をかけた
「いいのよ…。みんなで決めたことだし…。」
「しかし、哀君別れを告げず行くのは…。」
「いいのよ。それで…。それじゃ博士行ってきます。」
そう言うと灰原は阿笠邸をでた。

同じころ毛利探偵事務
今日は毛利探偵は調査、蘭は空手の合宿で今日はいない。
コナンはランドセルを背負うといつも通り学校へと向かった。

そして学校が終わりいつも通りの通学路
元太と光彦、歩美は昨日放送された仮面ヤイバーの話をしている。
「まったくこの子たちは変わらないわね…。」
「あぁ。でもあいつら俺たちと出会った時に比べるとずいぶん成長したよ…。」
そんな話をしていると歩美が
「あっ！ツバメさんだ！」
と近くの民家の軒先を指差した
「あら…。まだツバメがいたのね…。」
「でももうすぐツバメさん遠くに行っちゃうんだよね…。ずっと同

じところにいればいいのに…。」
「しかたないわよ…。ツバメのような渡り鳥はずっと同じところにはいれないのよ…。」
「そーなんだ。」
と歩美が言うと灰原が
「それじゃ、吉田さん、円谷君、小嶋君…。さよなら。」
と言うと元太、光彦、歩美とコナン、灰原はそれぞれべつの方向へ歩き出した。

こちらは元太、光彦、歩美の三人
「ねぇ光彦君、元太君なんかコナン君と哀ちゃんの様子おかしくなかった？」
「二人のですか？さぁーどうでしょうねーあの二人いつも変ってますからねぇ。」
「気のせいじゃないのか？」
と元太が言うと歩美は少し下を向きながら
「でもねなんかさっき別れる時に二人にはもう二度と会わないって…。そんな気がしたの…。」
「灰原さんはともかくコナン君はよく抜け駆けをしますけど。二度と会えないなんてことはないんじゃないですか？」
すると歩美は顔をあげて
「そうだよね。また学校で会えるよね…。」
（本当にどこか行ったりしないよね哀ちゃん、コナン君。）

第7話別れの時（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第8話名端島の新居

元太、光彦、歩美と別れた後コナンと灰原は阿笠博士のビートルに乗り港へ行きそこから高速船に乗り換えた。
それから間もなくするとコナンと灰原、阿笠博士を乗せた高速船は名端島の西側にある名端港に着いた。

名端島（めいたんとう）
人口約２５００人、周囲約１０？の島。産業は主に漁業。島の南西に小学校と中学校、港の近くには簡易郵便局や診療所があり人口は主にその辺に集中している。
また、観光も盛んである。

港を出ると車で島の南の方にある新居に向かった。

小学校と中学校を横目に見ながら海岸沿いの一本道を走っていくと島の南の高台の上にある洋館が見えてきた。
「あそこが母さんがいってた家だな。」
「そのようね…。」

それから5分ほどすると洋館に着いた。
その洋館は米花町にある工藤邸と同じぐらいの大きさで、三階建て、地下室もある。
「それにしても大きいのぉ。」
と阿笠博士があたりを見回しながらいった。
「とりあえず荷物を片づけるか。」
とコナンが言うと三人は片づけを始めた。
そして夜

灰原はバルコニーにでて外を眺めていた。
するとコナンが出てきた
「どうしたんだ？灰原。」
「ちょっと眠れなくてね…。夜風を浴びに来たのよ。」
「そうか…。」
「ねぇ、工藤君私たち恋人同士になったんだしその…。苗字じゃなく名前で呼び合わない？」
「いいのか！」
「えぇ。」
「それじゃあこれからもよろしくな哀！」
「こちらこそよろしくコナン。」
そう言うとコナンと哀はキスをした。
「それじゃそろそろ寝ましょう。」
「そうだな。おやすみ哀。」
「おやすみコナン。」
そう言うと二人はそれぞれの寝室へ向かった。

第8話名端島の新居（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

名端島という名前は名探偵から来ています。

次回からオリキャラが出る予定です。

これからもよろしくお願いします。

第9話転校初日（前書き）

いよいよ今回からオリキャラ登場です。

第9話転校初日

ここは名端島の名端小学校
名端小学校は生徒の数が少なく1学年に1組しかない。
この小学校に通う浅川達也(あさかわ たつや)と黒川(くろかわ)すみれがいつも通り話をしながら学校に校門をくぐろうとすると
「達也君あの子達だれかしら？」
と向こうから歩いてくるメガネをかけた少年と茶髪の少女を指で差した
「確かにここらへんじゃみかけん奴らだな。」
と達也は首をかしげながら答えた。
「転校生かなぁ？」
「まぁどっちにしろすぐにわかるだろう。」
と言うと達也とすみれは校門をくぐった。

その約15分後2年1組のホームルーム
このクラスの担任の山内晃(やまうちあきら)が教室に入ってきた
「みんなー静かにー今日は転校生を紹介するぞ！」
転校生という言葉を聞き教室内はざわついた
「女の子かなぁ。」
「かわいい子だったらいいな。」
クラスにいる子供たちがそういう話をしている中、達也とすみれは
「達也君さっきの二人にのうちどっちだと思う？」
「僕はどちらかと言うと茶髪の子だったらいいな。かわいいし。」
「女の子は見た目だけで決まるわけじゃないのよ。でもあのメガネの男の子だったらいいかなぁ。」
「お前もおんなじようなこと考えているんじゃねぇか？」
そんな話をしていると
「よし入ってこい！」

と言う声とともに朝見たメガネの男の子と茶髪の女の子が入ってきた
「今日からこのクラスでみんなと一緒に勉強することになった灰原哀さんと江戸川コナン君だ。みんな仲良くしろよ！」
と黒板に名前を書きながら紹介した
「みんなよろしく！」
とコナンが言うと哀が
「よろしく…。」
とボソッと答えた
「よし！じゃあ転校生が来たところでホームルームを始めるぞ！」

そして授業後
「ねぇコナン君に灰原さんだったけ？私、黒川すみれよろしくね。」
とすみれが言うと
「おうよろしくな！」
「よろしく。」
と言った
「ところでコナン君と灰原さん朝一緒に歩いていたけど前から仲がいいの？」
「えぇ。前も小学校でも同じクラスだったのよ…。」
「そうなんだー。そうだ今日学校終わったら向こうの方にいる達也ていう子と島の東にある洞窟を探検しようって話になっているんだけど一緒に行かない？」
「そうね…。私はパス。そういうの興味ないから…。まっ、こういうことが大好きな名探偵さんといってらしゃい。じゃぁ私かえるから…。」
「おい待て哀！」
（ははっあいつ逃げやがったな…。）

第9話転校初日（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第１０話洞窟探検

ここは名端島の東にある洞窟
ここの入り口にコナンと達也、すみれ、そして哀がいた。
「ここが入口か…。と言うのはいいんだけどなんでお前がいるんだよ！」
とコナンが哀の方を見ながら言うと
「気が変わったから来たのよ…。悪い？」
と言いながらコナンをジト目で見た
「いや、別に。」
とコナンが言うと
「それにしてもこの洞窟入っても大丈夫なの？」
と哀が首をかしげながら言うと
「大丈夫！大丈夫！ほら行こう。」
と言ってすみれが洞窟に入っていった。
そして、それに続くように三人が入っていった。

洞窟の中は薄暗くゴツゴツしている
「なぁ、すみれ懐中電灯ぐらい持ってないのかよ…。」
とコナンが言うとすみれは
「大丈夫だって！そんなのなくても。こうやって左手を壁に着けながら歩けば。」
と言いながら左手を壁にあて進んでいった。

それからしばらくすると
光が見えてきた
「あっ！着いたよ！」
と言うすみれのは言いながらその光の方へかけて行った。
それに続いて三人がそこに行くとそこには見渡す限りの大海原が広

がっていた。
「すごい…。」
と哀がつぶやくとすみれが
「そうでしょう！二人にこの景色見てもらいたかったの！」
と言った。

その後洞窟から家に帰るとコナンの携帯に蘭から電話があった
「もしもしコナン君？」
「なっ、なに蘭ねいちゃん？」
「家に帰ってもコナン君がいないからどこ行ったのかなぁって電話したのよ。」
そのあとコナンは蘭が合宿に行っている間に引っ越しをしたことを母親が迎えに来たことにして説明した。
「そうなんだ…。」
と言う蘭の声はなんだか寂しげだった。
「でもいつか会いに来てよね歩美ちゃん達や服部君達、佐藤さん達だって会いたいはずだから…。」
「わかったよ…。蘭ねいちゃん。それじゃぁさよなら…。」
と言うとコナンは電話を切った。
哀はコナンに電話の蘭が何を言ったか聞こうとしたらコナンが
「なぁ…。哀。」
「なにコナン。」
「またいつかみんなに会いに米花町に行こうな…。」
とコナンが言うと哀は少し微笑みながら
「えぇ。」
と答えた。

第１０話洞窟探検（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

後半に蘭とコナンが電話をするシーンがあるのにこのサブタイトルはどうかと思ってたりします。

これからもよろしくお願いします。

第１１話島内案内（前編）

コナンと哀が名端小学校に転校して最初の土曜日
哀とコナンは家から北に延びる海岸線沿いの一本道を歩いていた。
どこに向かっているのかというのはその前日にさかのぼる

授業後の教室
「ねぇ、灰原さん！」
とすみれが話しかけてきた。
「なに？黒川さん…。」
と哀が答えると
「灰原さん達ってこの島に来てからそんなに経ってないでしょ。だから、明日この島案内してあげる！」
と言ってきたのだ。哀は断ろうとしたがその後のすみれの強引な押しに負けてコナンと一緒にいくと約束してしまったのだ。

ふたたび海岸線沿いの道
「それにしても哀。誘われたのはお前だけだったんだろ？なんで俺と一緒にて言ったんだよ？」
「あら、ご不満？」
「いや…。そういうわけじゃないけど…。」

そこから１０分後集合場所
そこには腕を組んで仁王立ちしている達也とあたりを見回しているすみれがいた
「遅いぞ二人とも！」
「わりぃ。達也、すみれ。」
とコナンが言うと哀が
「そうね…。どっかの名探偵さんが準備が遅いせいで遅れてごめん

なさいね…。」
「なんで俺のせいなんだよ…。」
とコナンが抗議すると哀はジト目で見ながら
「何か間違ったこと言った？」
と言うとコナンは肩をすくめながら
「言ったません。」
と答えた。
「とりあえず行こう。」
とすみれが言うと
「そうだな。」
と達也が答え四人は集合場所の小学校を出発した。
小学校から北へ少し歩くと交番に着いたするとそこにいたお巡りさんが
「こんにちは。すみれちゃん、達也君。あれ、そっちにいる子たちは？」
と言いながらコナンと哀の方を見た。
「この二人はね、この前転校してきた、江戸川コナン君と灰原哀ちゃんだよ。」
とすみれが言った。
「コナン君に灰原さんか…。僕はこの交番に勤務する吉野良太（よしのりょうた）って言うんだよろしく。」
と言うと敬礼をした。
「よろしくお願いします。」
とコナンが言うと続いて哀が
「よろしく…。」
と言った。
「そうだ。四人とも少し休んでいくかい？」
「じゃぁ。せっかくだからお言葉に甘えて休んでいこうぜ。」
と達也が言うと四人は交番に入っていった。

第１１話島内案内（前編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第１２話名端交番と吉野さん

ここは名端交番の休憩室
「ところで君たちはどこから転校してきたんだい。」
と吉野巡査がお茶を出しながら言うと
「東京の帝丹小学校だよ。」
「私も右に同じ…。」
と答えた
「そうかー。東京からだとここ遠かったでしょ。」
「まぁ、ちょっとね…。」
「ところで前同じ小学校でったてことは、二人は仲がいいの？」
「えぇ。前の小学校では私とコナンと吉田さん、小嶋君、円谷君の三人で少年探偵団をやってたわ。」
と哀が答えるとすみれが
「少年探偵団？」
「えぇ。」
「探偵団って言っても猫さがしとかそんなのだろ？」
と吉野巡査が聞くと哀が
「えぇ。と言いたいとこだけど、この探偵さんといるといつも事件に巻きこもれるのよね…。」
と言いながらコナンを見た。
「悪かったな…。」
「ははっ。それは大変だね…。」
「ほんとよ。おかげで刑事の知り合い結構いるのよ。」
「でも刑事さんと知り合いなんていいなぁ。かっこいいんだろうなぁ。」
とすみれが言うと哀はクスッと笑いながら
「あら…、刑事がかっこいいのはドラマの中ぐらいで実際会ってみると結構普通の人よ…。」

「そうなんだ…。」
「そういえば吉野さんはいつからこの交番にいるの？」
とコナンが聞くと吉野巡査は
「そうだな…。初めてこの交番に勤務したのは五年ほど前だったかな…。あの時は自分が生まれ育った島で勤務できてうれしかったよ…。」
「あの時はって事は、今は？」
「今ももちろんうれしいさ！僕はこの島が大好きだからね！」
「そうなんだ…。吉野さんってこの島の事がとっても好きなんだね！」
と言うと達也が
「おい、そろそろ行かないと今日中に島の案内終わらないぞ！」
と言った
「あっ！そういえばそうだね。吉野さんありがとう。またねー。」
とすみれが言うとコナンと哀も続けて礼を言い交番を後にした。
「吉野さんって優しそうな人ね…。」
と哀が言うとすみれが
「そうでしょ！吉野さんってほんと優しいの！」
「次はどこ行くの？」
「そうだな次は…。」
四人はまた、北の方へ歩き出した。

第１２話名端交番と吉野さん（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回新キャラが登場する予定です。

これからもよろしくお願いします。

第１３話島内案内（後編）（前書き）

今回は新キャラが登場します。

第13話島内案内（後編）

今コナンと哀、すみれ、達也の四人は名端港へ来ていた。
「ここが島の唯一の玄関口名端港だ。ここから向こうに見えるのが簡易郵便局と診療所だ。」
と達也に言われあたりを見渡すとこじんまりとした診療所や簡易郵便局が見えた
「へぇー。そうなんだ。」
とコナンが言うとすみれが
「この辺にはお店とかもあって名端港の近くは島で一番人が多いところなんだよ！」
と言い終わるとすみれは手をポンッと叩き
「そうだ！淳史（あつし）君の家行こう！」
「淳史君？」
とコナンが聞くと
「うん！この島のお店屋さんに住んでるの！」
と答えた
「それじゃぁ行こっか！」
とすみれの意見でコナンたちは淳史の家に行くことになった。

五分後…
コナンたちは東商（あずま）店と看板に書かれた店の前に立っていた。
「おばさん、こんにちは！」
とすみれが言うと中にいた少し年老いた女性が
「すみれちゃんかい、こんにちは。あら、そこにいる子たちは？」
と言いながらコナンと哀を見た
「この二人はこの前転校してきた江戸川コナン君と灰原哀さん。」
とすみれが紹介すると
「あら…。そうかい。初めまして私は東嘉子（あずまよしこ）って言うのよ、よろし

く。」
と言った。
「よろしくお願いします。」
「よろしく…。」
と哀が言うとすみれが
「そういえば淳史君いますか？」
「淳史なら奥にいるよ。上がっていきなさい。」
「はーい！おじゃましまーす！」
と靴を脱ぎながら奥へ入っていた。
それに続くように達也、コナン、哀がそれぞれおじゃましますと言いながら入っていった。

中に入っていくとコナンより少し背が高い子供が
「おっ、すみれ、達也来たのか！そっちにいつのはこの前来た転校生だな。俺は東淳史（あずまあつし）3年生だ。よろしく。」
と言うと
「僕は江戸川コナンって言うんだ。よろしく。」
「初めまして、灰原哀です…。よろしく…。」
と二人が言った。
「そうだ！今二人に島の案内してるんだけど、淳史君も一緒に行こう！」
とすみれが言うと
「そうだな…。今準備するから待ってろ！」
と言い奥へ入っていった。

そのあと五人は島を一通り回った。
「それじゃぁ、月曜日学校でなー」
とコナンが言うとすみれが
「うんっ。また、月曜日ねぇー」
と答え五人はそれぞれ自分の家に向かって歩き出した。

第１３話島内案内（後編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

今日は七夕ですね。

これからもよろしくお願いします。

第１４話突然の訪問者

日曜日の朝
コナンは何回も押されるチャイムの音で目が覚めた。
「はい、はい、今行きまーす。」
とあくびをしながら玄関を開けるとそこには黒いニット帽をかぶった男がいた
「久しぶりだな…。坊や…。」
「赤井さん！！」
とコナンが驚いていると哀が
「なによ…。朝から大声出して…。」
と言いながら赤井の顔を見るとかなり驚いた様子で
「あなた…。確か…。」
「ＦＢＩ捜査官の赤井秀一だ。少し二人に話がある。」
「とりあえず中に入ってよ！」
とコナンが言うと
「それじゃぁ、上がらせてもらおうか…。」

家の応接室
「ところで赤井さん話ってなに？」
とコナンが聞くと赤井は
「実はあの後、組織の事をいろいろと調べていたら、偶然君たちの事が出てきた。」
「僕たちの事って？」
とコナンが聞くと赤井は
「江戸川コナンと工藤新一、宮野志保…つまりシェリーと灰原哀が同一人物だということを証明するようなものだ…。」
「その証拠が出てきてここに来たってことは私を逮捕でもするつもりなの？」

と哀が聞くと赤井は
「いや…。そういうことじゃない…。君たちがもしこのまま江戸川コナンと灰原哀として生きていくつもりなら証人保護プログラムを上手く使って君たちの戸籍を作ってやろうと思ってな…。」
「そんなこと…。いいんですか？」
と哀が聞くと赤井は少し間をおいて
「あぁ。君に関しては明美の件もあるしな…。」
「お姉ちゃんの件って？」
と灰原が聞くと赤井は少しうつむきながら
「俺は組織に潜入するために明美に近づいた…。しかし、仲間のミスで俺がＦＢＩ捜査官だとばれてしまい結果的に君のお姉さんが殺される原因を作ってしまった…。そのことのせめてもの罪滅ぼしといったところだろうか…。」
「どうして…。どうしてお姉ちゃん救えなかったの…。」
「俺の正体がばれた後君のお姉さんはどこに行ったか分からずじまいになってしまって、そして、１０億円強奪事件の前に俺にメールを送った、そのメールには１０億円強奪事件の後組織を抜け出せたら本当の恋人になりませんかと言う文と、Ｐ．Ｓ．私にもしものことがあったら妹をよろしくお願いします。てな、だから、これは明美の願いでもある。」
それからコナンと哀は話し合い江戸川コナンと灰原哀の戸籍を取得することにした。
「それでは、また、成功したら連絡する。」
「ところで赤井さん…。」
「なんだ…。坊や？」
と赤井が聞くとコナンは
「僕たちの正体を知っている人はＦＢＩの中に何人ぐらいいるの？」
「ＦＢＩの中では、俺だけだ…。」
「そう…。」
とコナンが言うと赤井は

「また、連絡する。」
と言い去って行った。

第１４話突然の訪問者（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

今回は無理やりなところがあって読みづらくすいません…。

なぜこのような展開になったかと言うと赤井に届いていたメールのＰ．Ｓ．の部分にこのようなことが書いてあったのではないかと私なりに考えた上で、コナンと哀の戸籍を作り仮に海外旅行のような展開になってもスムーズに進めたかったからです。

これからもよろしくお願いします。

第15話結成！新少年探偵団

名端小学校2年1組の教室
「ねぇ、灰原さん、コナン君、達也ー。」
とすみれが話しかけてきたのに対し
「なんだ？」
「なに…。黒川さん…。」
「すみれ、なんかようか？」
と哀、コナン、達也の三人が答えるとすみれは
「コナン君と灰原さんってここに転校してくる前、少年探偵団をやってたんだよね？」
「そうだけど…。」
とコナンが答えるとすみれは
「私たちも、コナン君と灰原さん、達也と淳史君、そして、私の五人で少年探偵団やらない？」
と言った。それに対し達也と哀は
「別にいいぜ！楽しそうだし！」
「悪くはないわね…。そうそう、探偵さん、まさかやらないなんて言わないわよね…。」
と言いながらコナンの方を見た
「わーたよ…。俺もやる…。」
とコナンが言うとすみれは
「きまりだね！それじゃぁ、淳史君にも話してくるね！」
と言って教室を出て行った。

名端島中央広場
今、ここにはコナン、哀、すみれ、達也、淳史の五人がいた。
「よし！みんな揃ったね！」
とすみれが言った。

「それにしても、コナンと灰原は相変わらず遅いな…。」
「仕方ねぇだろ、家が遠いんだから…。」
と言うようにコナンと達也が言い争っていると、すみれが
「ちょっと二人とも！せっかく今日は名端小学校少年探偵団が結成する日なんだから、喧嘩しないで！」
と言った。
「そうね…。黒川さんの言うとおりだわ…。」
と哀が言うと二人は喧嘩をやめた。
「そうだ！せっかくだから、コナン君や灰原さんから、少年探偵団の活躍いろいろ聞きたいなー。」
「そうね…。私が帝丹小学校に転校する前の話もあまり聞いてないし…。ちょうどいいかもね…。」
と哀が言うとコナンは
「わーたよ…。」
と言い帝丹小学校の少年探偵団の活躍を話し始めた。

最初に解決した事件の事

古城の事件の事

東都タワーの事件の事

警視庁の刑事の話や小林先生の事

そして、歩美、元太、光彦の事

「すごーい！そんなに活躍しているんだ！」
「まっ、コナン単独だったり、毛利探偵と一緒の時や私と二人の時まで、どこに行っても事件に遭遇するのよね…。こっちに来てから、さっぱり遭遇しないけど…。」

「わるかったな…。」
とコナンが言うと哀はクスッと笑いながら
「コナンの事件吸収体質は誰に引き継がれたのかしらね…。」
「お前な…。」
とコナンが抗議すると
「あら…。もしかしたら、少年探偵団に入ったから、また、事件吸収体質が復活したりして…。」
「変なこと言うなよ…。」
とコナンが言った時
「なんか僕の事忘れてない？」
と淳史が言いだした。
そのあと5人はそれぞれの家の向って歩き出した。

第１５話結成！新少年探偵団（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

やはり、コナンと言えば少年探偵団かなって思って書きました。

これからもよろしくお願いします。

第１６話海岸沿いの道

名端島　南に行く海岸沿いの道
今、哀とコナンは家に帰るため二人でこの道を歩いていた。
「ねぇ。コナン。」
「なんだ？哀。」
「今度一緒に島の外に行かない？」
「そうだな…。どこがいい？」
とコナンが聞くと哀は少し考えるようなそぶりを見せて
「そうね…。確かもうすぐ博士が発明品の修理をするために京都へ行くから、それについていくのはどう？」
「そうだな…。博士に頼んでみるか…。」

名端島　博士の家
「ただいまー。」
「お帰り、新一、哀君。」
と言いながら博士が奥から出てきた。
「博士確かもうすぐ発明品の修理をするために京都へ行くよな？」
「そうじゃが。それがどうした？」
と博士が聞くと哀が
「連れて行ってくれる？」
と言った。すると博士は首をかしげながら
「別にかまわんが…。どうしてまた急にそんなことを言い出すんじゃ？」
と聞くと哀はいつも通りほとんど表情を変えず
「たまには、島の外に行きたいのよ…。」
と言うと阿笠博士は
「ダメとは言わんが…。二人で京都観光をするのか？」
と博士が聞くと哀は

「そうよ…。」
と答えて自分の部屋に行ってしまった。
そのあと阿笠博士はにやにやしながら
「よかったのー新一。」
と言った。

京都へ行く前日　名端小学校　校門
「コナン君たち京都へ行くの？」
と言うすみれの問いかけに対し
「えぇ…。そうよ…。」
と哀は答えた。
「じゃぁ、お土産たくさーん買ってきてね！」
とすみれが言うと哀は
「えぇ…。」
と短く答えコナンとともに家に向かった。

名端島　阿笠博士の家
コナンと哀は京都へ行く準備をしていた。
「そういや、この島に引っ越してきてから初めてだな…。」
「なにが？」
と哀が聞くと
「島の外に出るのだよ。」
と言うと哀は
「そうね…。」
と短い返事をして自分の部屋に着替えを取りに行った。

第１６話海岸沿いの道（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第17話清水寺の舞台

今コナンと哀は京都駅にいる
「わしは、発明品の修理に行くから、新一と哀君はどこでも好きなところに行ってきなさい…。」
「わかったわ…。」
と哀が答えると二人は
「6時までにここに戻ってくるんじゃぞー。」
と言う阿笠博士の言葉を聞きながらバスに乗った。

京都　清水寺付近の土産物店
「コナン…。これなんかみんなへのお土産にどうかしら?」
と言いながら哀はコナンに八橋の入った箱を見せた。
「八橋か…。京都らしくていいんじゃないのか?」
とコナンが言うと
「じゃぁ買ってくる。」
と言い哀はレジに向かった。
(そんな単純に決めていいのかよ…。)
とコナンは思うのであった。

京都　清水寺
「やっぱり清水寺はおっきいなー。」
とコナンが言うと哀は下を見ながら
「よく清水の舞台から飛び降りるって聞くけど結構大変なことなのね…。」
と哀が言っているのを聞きながらコナンは
「哀そろそろ行くぞ!」
と言いながら清水寺の奥の院の方へ歩き出した。その時哀が
「コナン…。少し隠れましょ…。」

と言った
「どうしてだ？」
とコナンが聞くと
「ここが清水寺かいな！」
とやけに聞きなれた女の人の声がした。
声がした方を向くとそこには、服部平次と遠山和葉がいた。
「見つかると何か言われそうだから、さっさと隠れるか…。」
と言うとコナンと哀は柱の陰に隠れた。
「そんなことより和葉！さっさと行くで！」
「ちょー待ち！平次！」
と言うような会話をしながら二人は去って行った。
「行ったかな…。」
と言いながらコナンが柱の陰から出ようとすると
「すごい景色！蘭お姉さん、早く！早く！」
「今いくわよ！」
と言う声が聞こえてきた。
「ゲッ！蘭たちだ！」
とコナンが言うと柱の陰に隠れた。
「蘭さんいるの！」
「蘭だけじゃなく、元太や光彦、歩美までいる！」
「ほんと！とりあえずここから離れないと！」
と哀が言うとコナンと哀はその場を離れた。

京都　清水寺　入口
「まったく…なんであいつらがいるんだ…。」
「ほんとね…。」
「まったく…大阪の服部や和葉ちゃんならわかるけど…。」
「それでも京都で会うのはなかなかないんじゃない？」
「…そうだな。」
とコナンが言うと

「あの子たちが来ないうちに行きましょう…。」
と哀は言いながら五条坂の方へ歩き出した。
「次はどこに行くんだ？」
と言うコナンの問を聞いているのかいないのか哀は歩いていく。
「人に話きけよ！」
と言いながらそれに続くようにコナンも歩き出した。

第１７話清水寺の舞台（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第１８話名端島お土産騒動

コナンと哀が銀閣寺にいる頃　名端島　すみれの家
「明日はコナン君と哀ちゃんから京都のお土産もらうんだ！」
とすみれが言うとすみれの母は
「よかったわね！すみれ！お母さんにも、その子立ちから聞いた京都の話教えてね！」
と言った。それに対しすみれは
「うんっ！」
と元気よく答えて自室へと向かった。
（そういえば、なんで灰原さんだけみんな哀ちゃんとか呼ばないんだろう？コナン君以外灰原さんの事、名前じゃなく苗字で呼んでるし…。でも、友達なんだから、灰原さんだけ呼び方が違うっていけないよね…。）
「決めた！明日絶対灰原さんの事、哀ちゃんって呼ぶもん！」
次の日　名端島　中央広場
今ここにはすみれ、淳史、達也の三人がいた。
「やっと来た！コナン君！灰原！」
「よう！すみれ、淳史、達也！」
とコナンが言うとすみれは
「その…あ、あ、相変わらず眠そうだね！哀ちゃん！」
と言うと哀はあくびをしながら
「私、夜行性だから…。」
と答えた。すると、コナンは
「おめぇ、いつだったか歩美と同じような会話してなかったか？」
とコナンが言うと哀は首を少し傾げながら
「そういえばそうね…。前々から思ってたけど黒川さんって少し吉田さんに似ているわね…。」
「そっ、そうなの？」

とすみれが言うと哀は
「えぇ。」
と短く答えるとコナンが京都で観光したところの話を始めた。

３０分後…
「さてとお土産のご登場だ！」
と言ってコナンがお土産が入ってあるであろう袋を開けた瞬間
「ない！」
と言いながら袋をひっくり返した。
「えーーー！」
と達也と淳史が言うとすみれが
「とにかく探しましょ！まずはコナン君の家から！」
「そうだな…。」
とコナンが言と五人は島の南に向かって歩き出した。

名端島　博士の家　玄関
「おっきーい！」
とすみれが言うと達也が
「確かにでかいな…。」
と言った。
「とにかく探そう！」
とすみれが言うと五人はそれぞれ「おじゃましまーす。」と言いお土産を探し始めた。ちなみに博士は今留守である。

１０分後…
「あっ！これじゃない！」
とすみれが言った。声がする方に行くと博士の部屋の机の上にチョコレートが置いてあった。
「なるほど…。博士またこっそりとメタボっているのね…。」
と言うと哀は不敵な笑みを浮かべていた。

「灰原さん怖い…。」
とすみれがつぶやくと
「これじゃないわ…。」
と言いながらチョコレートをポケットにしまった。そのあと結局コナンの部屋からお土産は見つかり、すみれたちに渡した。
「明日こそは哀ちゃんって呼べるかな…。」
とつぶやきながらすみれは家に向かった。

この後、帰ってきた博士が哀にこっぴどく説教されたのは言うまでもない。

第１８話名端島お土産騒動（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

ちなみにすみれが灰原さんの事を「哀ちゃん」と呼ぼうとするところは「お金で買えない友情」の話を参考にしました。

これからもよろしくお願いします。

第19話哀ちゃんって呼ぶもん！

今日は月曜日すみれは教室で哀が来るのを待っていた。
（今日、灰原さんが教室に入ってきたら、おはよう！哀ちゃん！って言えばいいんだよね…。）
とすみれが考えていると教室に哀とコナンが入ってきた。
「おはよう！コナン君、えっと、その…あっアイスを家に帰ってから食べようと思うんだけど一緒にどう？灰原さん…。」
「あら…。アイスは少し季節はずれじゃない？」
と言うと哀は自分の机にランドセルをおき用具を机に入れた。

1時間目　数学
山内先生が黒板に来ながら様々なことを説明している。
（はぁーどうしよう…。灰原さんの事、哀ちゃんって呼べないな…。）
と考えていると
「黒川！黒川！」
と先生に言われ顔を上げるとそこには山内先生が立っていた
「どうしたんだ、黒川？」
と山内先生に聞かれたが
「何でないです。」
と答えると黒板に書いてある問題を解き始めた。

昼休み
「黒川…ちょっと来い。」
と山内先生に呼ばれ空き教室へ行った。
「黒川、何か悩み事でもあるのか？」
と山内先生が聞くとすみれは
「いえ…その…なんでもないです…。」

と小さな声で答えた。すると山内先生は
「そんなことないだろう！今日はなんだかいつもと様子が違うように見える！」
と言った。するとすみれは少し間を開けてから
「やっぱり何でもないです！」
と言うと空き教室を出た。
（はぁー灰原さんの事、哀ちゃんって呼びたいんだけどなんて聞けないよね…。）

下校時間
「それじゃぁ、今日、家に帰り次第いつもの広場に集合と言うことで！」
と言うと達也は真っ先に教室を飛び出していった。
「まったく…。俺たちも行くか、哀」
「そうね…。」
と言ういつも通りの会話をしながらコナンと哀が教室を後にした。
（はぁー結局哀ちゃんって呼べなかったな…。）
と思っていると突然
「哀ちゃんって呼びたいなら構わないわよ。」
と言われ振り向くとそこには哀が立っていた。
「その顔見ているとやっぱりそうだったの…。」
「えっ」
「私が帝丹小学校にいたころ、吉田さんが私の事哀ちゃんって呼ぼうとして結構頑張ってたのよ。あなた見てたらそれ、思いだしたのよ…。」
と哀が懐かしそうに言うとすみれは
「そうなんだ…。とにかくこれからもよろしく！哀ちゃん！」
と言うと哀は
「えぇ。」
と短く返事をして二人は握手をした。

「急がないと浅川君がおこるわよ…。」
と哀に言われすみれは教室を後にした。
（やった！哀ちゃんって呼べた！）
とすみれはかなりの上機嫌で家に向かった。
（黒川、どうやら問題は解決したようだな…。）
とその様子を見ていた山内先生は少し肩をなでおろしたようだった。

第１９話哀ちゃんって呼ぶもん！（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

今回も前回同様「お金で買えない友情」の話を参考にしました。

これからもよろしくお願いします。

第２０話映画館へ行こう！

とある日曜日コナン、哀、すみれ、達也、淳史の五人は今、すみれが懸賞で当てたチケットで映画を見るために名端島を出て瑠璃島へ来ていた。

四季色列島（しきしょくれっとう）　瑠璃島（るり）
人口は約６０００人、周囲約４０キロ、娯楽施設が多くあり付近の島などからたくさんの人が訪れる。

瑠璃島　映画館前
「どの映画みよっか！」
とすみれが聞いた。なぜこのような質問が出るかというとこのチケット映画は見れるがどの映画とは指定されてないからだ。
「そうだな…。俺はこれがいいかな。」
と言いながらコナンは探偵ものの映画の看板を指差した。すると
「私はそんな生臭い映画じゃなくてアインシュタインの映画がいいわ…。」
「私は仮面ヤイバーの映画がいい！」
「そうだな！俺も仮面ヤイバーがいいな！」
「何言ってるんだよ！こっちの方がいいに決まってるって！」
と言いながら淳史は特撮映画の看板を指差した。
「よし！じゃぁじゃんけんで決めよう！」
とすみれが提案すると四人は
「そうだな…。このままじゃ意見まとまりそうにないし…。」
「そうね…。」
「正々堂々やろうな！」
「僕はじゃんけん自信があるからこの映画に決まっているよ！」
とそれぞれ意見を述べた。

「それじゃぁ！行くよ！じゃーんけーんポン！」

瑠璃島　映画館の中

結局のところすみれが勝ち今は仮面ヤイバーの映画を見ている。

（はぁ…勝てなかった…。）

とコナンが思っている横ですみれと達也の二人が盛り上がっている。

映画が終わった後

「かっこよかったね！仮面ヤイバーの映画！」

「ほんと！ほんと！すごかったなー！」

とすみれと達也の二人が話している後ろでコナンと哀は

「元気ね…あの子たち…。」

「あぁ、そうだな…。」

と話しているとすみれが

「せっかく瑠璃島まで来たんだし船が来る時間まで探検しない？」

と言った。コナンや哀も特に断る理由もなかったので一緒に行くことにした。

瑠璃島　中央通り

今五人は瑠璃島の中央通りにいる。瑠璃島は娯楽の島で瑠璃島がある四季色列島を始め名端島などからかなりの人が来ている。映画館やボーリング場、デパートさらには瑠璃ドリームランドと言う遊園地までありこれら娯楽施設で産業がなりったている。

「それにしてもスゲーな…。」

とコナンが言うとすみれは

「そうでしょう！今いるこの島の東側の地域はいろんなところがあってそこで働く人たちは西の方に住んでるんだよ！」

と言った。

その後瑠璃島を船が来るぎりぎりの時間まで五人は中央通りを歩

き名端島に帰った。

第２０話映画館へ行こう！（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第21話いちょうの並木道

名端島　名端小学校　2年1組

現在、コナン、哀、達也、すみれと同級生で吉野巡査の娘の吉野(よしの)光(ひかり)、学校の先生を両親に持つ辰川守(たつがわまもる)は掃除当番なので掃除をしていた。といっても達也と守は掃除をせず二人で遊んでいるが…。

「やっと終わったー！」

と達也が言うと

「達也は何もやってないでしょ！」

と光が抗議した。そんな二人を横目に

「私先生のところ行ってくるね！」

と言い残しすみれは教室を出て行った。

十分後…

掃除を終え校門を出たコナンと哀は家に向かって歩き出した。

家に向かう道は二つあり一つはいつも通る海岸沿いに道、もう一つは島の中央を通る道である。二人は今そのうち島の中央を通る道を歩いている。

「きれいね…。」

と言いながら哀は周りを見回した。

「確かにな…。」

と言いながらコナンも周りの赤く染まったいちょうを見ている。

「どこか紅葉の見えるところに行きたいわね…。」

「そうだな…。このへんでいいところがないかあいつらに聞いてみるか…。」

とコナンは言った。あいつらとはもちろんすみれと達也の事である。

「そうね…。」

と答えた後哀はコナンの方を向き

「そろそろ行かないと浅川君に、また、遅いぞ！なーんて言われち

ゃうわよ…。」
と言った。
「そうだな…。」
と言いコナンが歩き出すとコナンの手に哀が手を添えたコナンはその手を握って二人は手をつなぎながら家に向かった。

名端島中央広場
今この広場にはコナンと哀、すみれ、達也、淳史がいる。
「ねぇ…コナン君、哀ちゃん！」
とすみれが笑顔で話しかけてきたので哀が
「なに…黒川さん？」
と聞くとすみれは
「今度ね家族で紅栗島(べにぐりとう)まで紅葉を見に行くんだけどお母さんがみんなも誘ったらって言ってるの！どうかな？」
と聞いたそれに対し四人は
「いいわね…。行きましょう…。」
「そうだな…。」
「行こうぜ！みんなでさ！」
「俺は店の手伝いする約束してるからパス…。」
と返事をした。
「それじゃぁ淳史君以外の三人が来るんだね！それじゃぁ明日港に集合ってことで！」
とすみれが言うと
「あぁ…。」
「えぇ…。」
「コナン！遅れるんじゃねーぞ！」
「なんで俺ばっかり…。」
「お前がいつも遅いからだ！」
と言うも通りの会話を始めた。

その後すみれが止めに入り五人はそれぞれの家に向かって歩き出した。

第２１話いちょうの並木道（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第２２話紅栗島の紅葉

今、コナンと哀、達也、すみれの四人はすみれの両親とともに紅栗島に来ていた。

四季色列島　紅栗島
人口約１５００人、周囲３０キロ、島の北側が紅葉の名所として有名。また、南側には多くの栗の木がある。

「きれーい！」
とすみれが元気よく走り回っている。現在紅栗島をコナン、哀、すみれ、達也の五人で散策中である。
紅栗島の紅葉は昨日コナンと哀が見た名端島の紅葉よりもきれいだった。
「ほら！早く！早く！」
「待てよ！すみれ！」
と言う会話を聞きながらコナンと哀は
「あの子たち哀変わらず仲がいいわね…。」
「そうだな…。」
というような会話をしている。

その後…
四人はいちょうの木の下で場所取りをしていたすみれの両親と合流し昼ご飯を食べ、その後コナンと哀は二人で散策を始めた。
「ほんとにきれいね…。」
「あぁ…。」
「こういう時はお前のほうがきれいだよとか言わないの？」
「それじゃぁ…」
「バカね…そんなこと言われて私が喜ぶと思う？」

と言うと哀は
「早く黒川さんたちと合流しないと…。」
と言いながら歩き出した。

三十分後…
今コナンと哀、達也、すみれとその両親は名端島へ向かう船に乗り換えるため瑠璃島行の船に乗っていた。
「きれいな紅葉だったね！」
「そうだな！」
と達也とすみれが話している。
「また来たいな…。」
「そうね…。」
と言うと哀は少し間をおいて
「ねぇ…コナン…。」
と言ったコナンが
「なんだ、哀？」
と聞くと
「あの子達元気にしているかしら…。」
哀が言うあの子達とは米花町の少年探偵団の事であろう
「げんきにしているんじゃねーか…。」
「今度会いにいかない？今頃ながら何にも言わず出て行ったことが悪く感じて…。」
と言うとコナンは海の方を見ながら
「そうだな…。けど…」
「けど？」
「これでよかったんじゃないか？」
「どういうこと？」
「前も行ってように俺の体はどんどんあのころの体に近づいている…蘭が俺と工藤新一が同一人物だと気づいたら…ってそしたら蘭を気づ付けるんじゃないかと思ってな…。」

「それもそうね…。」
と言うと哀も海を見始めた。

第２２話紅栗島の紅葉（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

後半部分はやはり哀ちゃんが少年探偵団や蘭の事を気にするのではないかと思って書きました。

また、最初考えていたよりも長くなったので章を作成しました。

これからもよろしくお願いします。

番外編1東淳史の一日（前書き）

今回は番外編です。

番外編1東淳史の一日

名端島　名端小学校　3年1組
「今日は昨日話したように午前中で授業が終わりますが、早く終わったからと言って、ずっと遊んでいたりせず、おうちの人の手伝いをしましょう。」
と言う担任の葛原真世先生の話が終わると挨拶をしてみんな教室を出始めた。

教室を出て淳史が廊下を歩いていると
「よお！淳史！今日やったテスト自信あるか？」
と同級生の上原広介に話しかけられた。
「まあまあかな…。」
と答えると淳史はさっさと校門に向かった。

名端島　名端小学校　校門
「淳史君！」
と話しかけながらすみれが後ろから走ってきた。
「どうしたの？」
「今日中央広場に来れる？」
「いや…今日はいいや…。」
と返事をすると家に向かって歩き出した。

名端島　東商店
「淳史！ちょっと出かけてくるから店番しててね！」
と母に言われ淳史は店の方に来た。
「行ってらっしゃい！」
と見送ると淳史は椅子に座りマンガを読み始めた。

約十分後…
店に吉野巡査がやってきた。
「いらっしゃいませ！」
と言うと吉野巡査はニコニコしながら
「おや…店番かい？えらいね…うちの光にも見習わせたいよ…。」
と言うと吉野巡査は店の商品棚に置いてあるタオルをレジまで持ってきた。
「タオルが一点で百五円です。」
「それじゃぁこれで…。」
「ありがとうございました！」
と言うと吉野巡査は
「がんばれよ！」
と言って店を出て行った。

この東商店は島にある唯一の日用品を扱っている店だからか客が多い。達也のお母さんやらすみれのお母さんも洗剤やかごなどを買いに来ていた。

やがて、1時間ほどたつと
「ごめんね…。浅川さんとお話ししてたら遅くなっちゃった。」
と言いながら夕食の材料であろう野菜を持って帰ってきた。

その後淳史は部屋に戻って宿題を始めた。

宿題を解き終えゲームをしていると姉で小学校6年生の東由香里（ゆかり）が帰ってきた。

そのあとみんなで食卓を囲み、お風呂に入り、テレビを見て、明日の用具を準備し日記に
「今日は学校から帰ったあと店番をしました。吉野じゅんさにほめ

られました。」
と書き布団に入った。

番外編1東淳史の一日（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

淳史が登場してもあまりに影が薄いためこのような話を書きました。

次回も番外編の予定です。

これからもよろしくお願いします。

番外編2すみれと達也（前書き）

今回も番外編です。

番外編2すみれと達也

コナンや哀が引っ越してくる約1年前
名端島　菅原邸（現　阿笠博士の家）
「おばさんありがとう！」
「いいのよ…。また、おいで…。」
とこの家に住む菅原八重子に言われすみれは
「また、来るね！」
と言って菅原邸を後にした。
「今日もいっぱいお菓子もらったね！」
とすみれが言うと達也は
「少しは遠慮しろよ！」
と横から注意する。
「いいじゃないの！くれるんだし！」
「まったく…。」
「そうだ！達也！ちょっと探検しない？」
「たんけんって？」
「あの洞窟だよ！向こうにある！」
とすみれが目を輝かせながら言うと
「でも…お母さんがあそこは危険だから勝手に行っちゃいけないって…。」
と達也は顔を曇らせた。
「ばれなきゃ大丈夫だよ！行こう！」
と言いながらすみれは洞窟のある方に歩き出した。

名端島　洞窟前
　海岸沿いの崖に細い道とその先に大きな洞窟が口を開けている。
「ここが洞窟の入り口ね！」
と言いながらすみれが中に入ろうとすると達也はすみれの背中に隠

れながら
「やっぱるやめようよ…。」
意見すると
「なに言ってんの！ここまで来たんだから行くよ！」
と言ってすみれは洞窟の中に入って行った。
「待ってよー！すみれ！おいてかないで！」
と言って達也はすみれの後を追いかけた。

名端島　洞窟内部
　すみれが思いつきで行こうといったため懐中電灯など足元を照らすものをもってこなっかたので何も見えず真っ暗である。
「ねぇすみれ…戻ろうよ…。」
と達也が弱弱しい声で言うと
「もー！行くって言ったら行くの！」
「どこに？」
「洞窟の一番奥に決まってるでしょ！」
「迷って出られなくなったらどうするの？」
と言うとすみれは振り返って
「そうならないようにずっと壁伝い歩いてるんでしょ！」
「そうだけど…。」
と達也が言うとすみれは再び歩き出した。

十分後…
　すみれが左手を壁に付けながら歩いていると歩いていると向こうから光が差してきた。
「出口だよ！」
と言いながらすみれが駆けていくと
「待ってよ！すみれ！」
と言いながら達也が後から追いかけて行った。
達也がすみれに追いつくと

「すごい…。」
とつぶやいた。
達也とすみれの視線の先には見渡す限りの大海原が広がっていた。
「この島にこんなところがあったなんて…。」
とすみれが言っていると日が暮れ始めた。
「きれい…。」
とすみれが言うと達也は
「そろそろ帰らないとみんな心配するんじゃない…。」
と言った。するとすみれは振り返って
「帰ろうか…。」
と言うと洞窟の方へ歩き出した。

番外編2すみれと達也（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回から新章に入る予定です。

これからもよろしくお願いします。

第２３話ついに来た冬休み

名端島　名端小学校　２年１組
　終業式が終わり山内先生から冬休みの諸注意を聞いている。
「…ということだ！みんな校長先生も行っていたが事故やけがなどがないように！」
と言うと挨拶をしてみんな教室を出て行った。

名端島　名端小学校　校門
「よっしゃー！冬休みだ！」
と達也が言うとすみれが
「去年みたいに学校行く前の日に宿題が終わらないとか言って家に来ても手伝わないからね！」
と言った。それに対し達也は
「なんでだよ…。」
と抗議する。
「そうしないと自分のためにならないでしょ！」
と言うとすみれは教室を出て行った。

名端島　中央広場
　今ここにはコナン、哀、淳史、すみれ、光と同級生の西宮明日香（にしのみやあすか）、横川優太（よこかわゆうた）がいた。
「それで…。黒川さん…。突然広場に来いなんて何の用かしら…。」
「何の用ってわけでもないけど…。みんな冬休みの予定とか決まっているのかなーって思って！」
「私たちは今のところ何も…。」
と哀が答えると他の四人も
「私は特に…。」
「私も今はないかな…。」

「俺は正月に岡山のおじさんの家に行くぜ！」
と答えた。するとすみれは
「実はね、家族みんなで旅行会社の旅行券が当たるやつ応募したらいっぱい当たっちゃって友達を何人か連れて行っていいって言ってるからみんなどうかな？って思ってさ！」
とニコニコしながら答えた。
「あなたのところって家族そろってくじ運がいいのね…。ところでどこに行くの？」
「えっとねーロンドン！」
「ロンドン！マジかよ！」
とコナンが興奮しながら言うと
「うん！ほんとだよ！クラスのほかの子達や山内先生にも声かけたからもうすぐ来ると思うけど…。」
「クラスの子達って何人分あったたの？」
と哀が聞くとすみれは少し考えてから
「確か…２０人分！」
「よくそんなに当てるわね…。」
「うん！だって家族四人で五人分のやつ応募して四人とも当たったんだもん！」
とすみれが言うと哀は少しあきれ気味で
「その強いくじ運何パーセントでもいいから少し分けてほしいわね…。」
と言うと達也と守、根津正英（ねづまさひで）、藤川龍城（ふじかわたつき）が来た。
それから間もなく一宮由紀（いちみやゆき）、筒野春香（つつのはるか）、西山明（にしやまあかり）が来たそして最後に
「おっ！みんな揃っているようだな！」
と言いながら山内先生がやってきた。
すみれがみんなにそれぞれさっきの話をすると全員が来ることになった。
　そのあとみんなはそれぞれ準備をするため家に帰って行った。

第２３話ついに来た冬休み（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

今回は無理やりな部分があってすみません…。

次回はコナン君たちがロンドンへ行きます。

これからもよろしくお願いします。

第２４話いざ！ロンドンへ！

東京　新東京国際空港
「みんな！そろったか？」
と山内先生が言うと由紀が
「すみれと光がいまトイレに行っていていません！」
と言ったのに対し山内先生が
「そうか…。」
と答えた時、向こうからすみれと光が小走りで来た。
「ごめん…遅くなっちゃって…偶然そこで友達に会って話してたら少し遅くなっちゃった…。」
と息を切らしながらすみれが言った。
「ともかくこれで全員そろったわけだから搭乗口に行くぞ！」
と山内先生が言いながら歩き出した。

飛行機の中
「楽しみだな！ロンドン！」
「ほんとだね！コナン君はどこに行きたいの？」
とすみれがコナンの方を向くとコナンは哀に寄りかかり寝ていた。
「コナン君寝っちゃってるの？」
とすみれが小さい声で聞くと
「そうよ…。」
と答えた。すみれは達也の方を向くと
「コナン君寝ているみたいだから静かにしてあげよう…。」
と小声で言った。
「そうだな…。」
と答えると達也は目をつぶって寝始めた。

ロンドン　ベーカー街２２１Ｂ

今は自由行動の時間なのでコナンと哀、達也、淳史の四人で行動している。
「なるほどここがあなたの大好きなシャーロック・ホームズの家ってわけね…。」
「あぁ！やっぱりロンドンに来たならここにこねーとな！」
「まったく…いつまでここにいるつもり？」
「そうだな…そろそろ行くか…。」
と言いながらコナンは周りを見て
「達也と淳史は？」
と聞くと哀は呆れたような顔で
「あなたがはしゃいでいる間に外に出たわよ…。」
と言った。するとコナンは
「それじゃぁ追いかけるとするか…。」
と行って家を出ると
「久しぶりだな！」
と少年の声をかけられた。
「アポロか！久しぶりだな！」
とコナンが言うとアポロは
「ほんとだな！ところでそこにいるのは？」
と聞いた。するとコナンは哀の方を向いて
「こいつは俺が通っている小学校の同級生で灰原哀だ！」
と言った後にアポロの方を向き
「こいつはアポロ、芝の女王ミネルバ・グラスの弟だ！」
と言った。すると哀は
「あなたが…。コナンが前ロンドンに行った時に出会ったっていう子ね…。ゆっくりお話ししたいけど知り合いとはぐれっちゃって今探しているからまた今度ね…。」
と言うと哀はコナンの手を引っ張って行った。
「いきなりなんだよ！哀！」
「早く二人と合流しないと遠くへ行っちゃうかもしれないわよ…遠

くへ行って探すのが面倒になる前に探しださないと…。」
というような会話をしながら歩いていると街中を歩いていた二人に合流できた。

第２４話いざ！ロンドンへ！（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

ロンドンへ行くということでアポロに登場してもらいました。

コナン君たちにはもう少しロンドンにいてもらう予定です。

これからもよろしくお願いします。

第２５話灰原誘拐事件！？

ロンドン　ホテル前
今ここでコナンと哀は昨日偶然出会った芝の女王ミネルバ・グラスの弟アポロと再会し日本でコナンが遭遇した事件の事やミネルバさんのその後のことについて話をしていた。
「結構日本でも事件に遭遇してるんだな…。」
とアポロが言うと哀は
「そうよ…この探偵さんの事件吸収体質には結構迷惑しているんだから…なぜか名端島に引っ越してからはさっぱりだけど…。」
と呆れたようなポーズをとって言うと、横でコナンが
「悪かったな…。」
と言った。その時
「おはよう！哀ちゃん！」
「灰原さん…おはようございます…。」
と言いながらすみれと春香が出てきた
「おはよう…黒川さん、筒野さん…。」
と哀が返事をするとすみれはコナンの方を向いて
「コナン君もおはよう！ところでそこにいる子はだれ？」
と言った。それに対しコナンは
「こいつは芝の女王ミネルバ・グラスの弟のアポロだ！」
と言ったからすみれたちの方を向き
「あの黒い髪をポニーテールにしている女の子のが俺の同級生の黒川すみれ、その横にいるメガネをかけている女の子は、すみれと同じく俺の同級生の筒野春香！」
とコナンが紹介した。
「よろしく！アポロ君！」
「よろしくお願いします…。」
「よろしくな！二人とも！」

とそれぞれ挨拶が終わるとすみれが
「そうだ！哀ちゃん！コナン君！春香ちゃん！朝食まで時間があるし、このへん散歩してみない？アポロ君も！」
と言った。
「いいぜ！ところでお前はどうするんだ？」
「おれはパス…。」
「私は行くわよ…。ロンドンの朝って少し興味があるのよね…。」
「私も行こうかな…。」
とそれぞれ返事をしコナンを除く四人が散歩に行くことになった。

数十分後…
　コナンがホテルのロビーで達也と話しているとすみれが血相を変えて飛び込んできた。
「どうしたんだ、すみれ？そんなに焦って…。」
と言うとすみれは
「コナン君…ちょっと…。」
と言いながら先生の部屋に向かった。

ロンドン　ホテル　１０３５号室
「先生少しいいですか？」
とすみれが言うと山内先生は
「今は暇だから大丈夫だよ…とりあえず上がりなさい…。」
と言いながら部屋に招き入れた。
「どうしたんだ、すみれ？」
と山内先生が尋ねると
「哀ちゃんが…哀ちゃんが…」
「哀がどうかしたのか！」
とコナンが少し焦った様子で聞いた
「哀ちゃんがいなくなっちゃったの…。」
「いなくなったってどういうことだよ！」

「わからないの…そこにある公園を四人で散歩してたら哀ちゃんがトイレに行くって言ってトイレに行ったの…しばらくたっても帰ってこないからおかしいなって思って様子も見に行ったら女の人にこんな紙を渡されたの…。」
と言いながらすみれが出した手紙にはワープロで
「この子を返してほしければ、火を使う悪人を追いかけた道を通り、我にたどり着け、なお、我々は常に貴様らを監視している。おかしな動きがあればこの子の命がないことを通知しておく。」
と書いてあった。

第２５話灰原誘拐事件！？（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第２６話ロンドン捜査網

ロンドン　ホテル前
「とりあえず灰原がいなくなったところまで行くか…。」
とコナンが言うと山内先生は
「みんなにはコナン君と灰原さん、黒川さん、淳史君、春香さんは別行動と伝えておくよ…。」
と言い残しホテルに戻った。

ロンドン　公園
「ここで哀と別れたんだな…。」
とコナンが尋ねるとすみれは
「うん…。」
と答えた。
（くそーどこに行けばいいんだ…火を使う悪人って誰だ…。早くしねーと哀が！）
と焦った様子のコナンにアポロが
「もしかしたらさ…火を使う悪人ってハーデスの事じゃない？」
と言った。するとコナンは
「そうかもしれねーな…。あの時蘭たちとおった道ってまだ覚えてるか？」
「あぁ…確か最初はビックベンでその後は…」
そのあと四人はロンドンの事件の時蘭たちが通ったであろう道を通りウィンブルトンに着いた。

ロンドン　ウィンブルトン　センターコート
「哀！いるか？」
と言いながらセンターコートに入るとそこには血を流して倒れてい哀がいた。コナンは哀に駆け寄ると

「おい！哀！返事しろ！まだ、息がある…早く救急車を…」
と言いながら振り向くと
「ドッキリ大成功！」
と言いながら有希子がやってきてその後ろから世界的推理小説作家の工藤優作がやってきた。
「父さん…それに母さんまで…ドッキリってまさか！」
と言いながら哀の方を向くと血まみれ（？）の哀が何事もなかったように立っていた。
「思ったより早かったのね…。」
「早かったのねじゃねーよ！みんなどんなけ心配したかと…」
「心配したのはあなただけよ…。アポロ君もあなた以外の今回の旅行参加者もみんな知ってるわ…。ドッキリやるから協力してって頼んだから…ついでに優作さん頼んで、もし、警察に電話されても大丈夫なようにしてあるから…。」
「おめーな…。」
「いいじゃない…ほんとに誘拐されたわけじゃないし…。」
「まったく…。」
とコナンが言うと哀は血のりを流しに行くといいその場を離れた。

飛行機の中
「それにしても楽しかったね！ドッキリ！」
「僕も見たかったな…。」
と横から優太が残念そうに言うとすみれは
「ダメだよ…優太君演技へたくそなんだからばれちゃうよ！」
と言うと今度は哀の方を向いて
「そういえばさー明日クリスマスだよね！」
と聞くと哀は
「そうよ…それがどうしたの？」
とそっけなく聞くと
「明日哀ちゃんの家でくりすますパーティしない？」

「明日？阿笠博士やコナンの意見聞かないと…それに準備だって…。」
「いいじゃない！準備手伝うからさ！もし、哀ちゃんの家がダメなら私の家でもいいし！」
「そうね…わかったわ…。」
と言いながら哀が窓の外を見ると東京の夜景が見えてきた。

第２６話ロンドン捜査網（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第27話クリスマスの夜

名端島　阿笠博士の家
今この家にはコナンと哀、阿笠博士、達也、淳史がいた。
「おじゃましまーす！」
と言いながらすみれが部屋に入ってきた。
「やっと来たか！」
とコナンが言うとすみれは手を顔の前で合わせて
「ごめん！準備が時間かかってさ！」
「まっ、いいけどよ…。ここ遠いし…。」
「とりあえずみんな揃ったんじゃ！始めようか！」
とコナンが言うとみんなは
「メリークリスマース！」
という掛け声とともにクリスマスパティーを始めた。

みんなが盛り上がっている中コナンと哀は2階のバルコニーにいた。
「みんな結構盛り上がっているみたいね…。」
「そうだな…。」
「ねぇ…。覚えてる？私たちが始めた出会った日の事…。」
と哀が聞くとコナンは外の方を見た
「忘れるわけねーだろ…。確かお前が嘘泣きしてそれでお前を家まで連れて行くなんて話になってよーそしたら突然泣き止んで脅した時だろ…。でも、お前泣きまねはうめーけど、寝たふりは下手だったよな…。」
「そうね…。」
と哀がいつも通りそっけなく答えると
「ところでなんであの時…蘭が粥を作って持ってきたときに寝たふりなんてしたんだ？」

とコナンが聞くと哀はコナンと同じように外を見ながら
「やっぱりあなた何もわかってないわね…。似てたのよ蘭さんが…。」
「似てたってまさか！」
「そのまさか…。お姉ちゃんそっくりだったのよ…。」
「そうなのか…。」
とコナンが言った時
「あー二人ともこんなところにいた！」
と言いながらすみれが部屋に入ってきた。
「ちょっと私の部屋に勝手に入んないでくれる…。」
と哀が抗議するとすみれは
「だってコナン君も哀ちゃんもどこか行っちゃうんだもん！早くみんなのところ戻ろう！」
と言うとすみれは哀の手を引き部屋を出て行った。
「騒がしい奴だな…蘭たちは今頃どうしているやら…。」
とつぶやきながらテレビを見るとあるニュースをアナウンサーが読み上げた。
「たった今入った情報によりますと現在ここ坏戸デパートに爆弾を持った男性がデパートの客を人質に立てこもっています。現場の山野（やまの）アナ！」
とスタジオのアナウンサーが言うと画面に杯戸デパートが映し出され画面に映った山野アナが
「はい！こちらは杯戸デパートの前です。先ほど入った情報によると男はデパートの従業員らを人質に身代金と逃走用の車を要求している模様です。こちらからは以上です。」
と緊張した面持ちで告げた。
「杯戸デパートっていえば結構米花町から近いな…。」
とコナンがつぶやくと突然横から
「あなたかいないからあの子たちが巻き込まれてはいないと思うけど…。」

と哀が言った。コナンが驚いながら
「いつからいたんだよ！お前！」
と言った。
「あなたがテレビ見始めたあたりから…さっさと戻らないと、また、黒川さんに文句言われるわよ…。」
「わーたよ…。」
と言うとコナンはテレビを消し、哀と一緒に一階に降りて行った。

第２７話クリスマスの夜（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

番外編3うさぎとすみれ

名端島　すみれの家
「それじゃぁ行ってきまーす！」
と言うとすみれは勢いよく家を飛び出しウサギの世話をするため学校へ向かった。

名端島　名端小学校　飼育小屋前
「メメちゃん！にんじんだよ！」
と言いながらすみれはウサギのメメにえさのにんじんを与えていた。
すると
「黒川、今日もウサギの世話か？」
と言いながら山内先生が近づいてきた。
「はい！」
とすみれが元気よく答えた
「さっき生野(いくの)先生に聞いたのだがそのウサギをここに連れてきたのは黒川なんだってな…。」
「はい…そうですね…あれは山内先生がこの学校に来る少し前の事です…」

1年前　名端島　名端神社
「達也、みっけ！」
「今日も勝てなかった…。」
と達也がつぶやくと淳史が
「それにしてもなんですみれはそんなに強いの？」
「ひみつー！」
と言うとすみれは階段を駆け下りて行った。

階段の中ほどまで来たとき突然雨が降り出した。頭を手で多い家

に急いで帰ろうとすると横の藪に段ボールの箱が置いてあり小さなウサギが横たわっていた。
「大変！」
と言いながらすみれはそのウサギを抱きかかえ家に帰った。

名端島　すみれの家
「ただいま…。」
と言い家のドアを開けると母が出てきて
「すみれ、突然雨が降ってきたけど大丈夫？」
と聞きながら私の手元にいるウサギを見た。
「どうしたのすみれ…そのウサギ？」
「神社の階段のところにいた…。」
「ダメよ…ウサギなんか連れてきちゃ…お父さんが動物が苦手だってしってるでしょ…。」
「でも、雨でぬれてかわいそうだったから…。」
とすみれが言うと母は
「わかったわ…雨がやむまでの間、家に置いといていても…でも雨が止んだら元いた場所に返すのよ…わかった？」
「はい…。」
とすみれが返事をすると母は居間へ入って行った。

「それでどうしたんだい？」
と山内先生に聞かれるとすみれは
「そのあとしばらくたって雨が止んで元の場所に返すって言って家を出たんだけど…」

ふたたび1年前　名端島　名端神社　階段の途中
「ごめんね…ウサギさん…家には置けないみたい…。」
と言いながらすみれがウサギを段ボールに戻そうとすると
「黒川さん…そこで何してるの？」

と声をかけられた振り向くとそこにはその時、すみれたちのクラスの担任で飼育委員会顧問のだった秋波舞(あきなみまい)先生が立っていた。すみれが秋波先生に事情を話すと
「だったら校庭の飼育小屋で飼うっていうのはどうかしら？それなら黒川さんもいつだって会いに行けるし…。」
「いいの？」
「飼育委員会顧問の私が言ってるのよ！いいに決まってるじゃない！」

「…そのあとそのウサギにメメっていう名前を付けてここで飼育し始めたの。秋波先生はそのあとすぐに結婚して退職しちゃったけど…。」
と言うと山内先生は
「そうか…それじゃぁこれからもメメを大切にしてやれよ！」
と言うと校舎の方へと歩いて行った。

番外編3うさぎとすみれ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回も番外編の予定です。

これからもよろしくお願いします。

番外編４すみれ名端島初上陸！

名端島　中央広場
「そういえば今日だったよな…。」
と達也が話しかけると横にいたすみれは
「何が？」
と聞き返した。
「ほら…1年前のこの日…」

1年前　名端島　すみれの家
この日すみれの一家は離島での生活への憧れからこの島へ引っ越してきた。
「すごーい！」
と言いながら当時小学5年生だったすみれの姉はきれいに掃除され新築のようにきれいな家の中を走り回っていた。
「もう…あの子ったら…ご近所さんへあいさつをしに行くからついてきなさい…。」
と母が言い家族そろって近所にあいさつへ行った。

ご近所さんのあいさつを終えるとすみれは姉と一緒に家を飛び出した。初めて見るような大自然に驚いたりしながら散策しているうちに姉とはぐれてしまった。
「お姉ちゃんどこー！」
と大声を出すが返事は帰ってこない。すみれがとうとう泣き出してしまった時
「お前こんなところでどうしたんだよ？」
と同い年ぐらいの男の子に話しかけられた。
「お姉ちゃんとはぐれちゃったの…。」
「それにしてもお前初めて見るやつだな…引っ越してきたのか？」

「うん…。」
と言うとその男の子はしゃがみこんで座っていたすみれに目線を合わせた。
「俺はこの島に住む浅川達也だ！お前は？」
「私は…黒川すみれ…。」
とすみれが言うと達也は手をさしだし
「よろしくな！すみれ！」
と言うとすみれはその手を握り
「うん…。」
と答えた。

そのあとすみれは島の案内もかねて達也とともに島内を散策した。
「そんでもってここが名端島の交番だ！」
と言うと達也は立ち止まった。
「吉野さーん！」
と達也が呼ぶと中から男の人が出てきた。
「なんだい？」
とその男の人が聞いた。
「この子引っ越して来たばかりなんだけど、迷子になっているみたい…。」
と達也が言うとその男の人はすみれの目線に合うまで腰を下げて
「私はこの交番のお巡りさんの吉野だ…よろしくね！」
と言うとすみれは
「黒川すみれです…よろしくお願いします…。」
と言うと吉野巡査は奥から島の地図を出してきて
「すみれちゃん…おうちの周りに何があるか覚えてるかな？」
と聞くとすみれは
「うーんと…確か、お店屋さんがあった…。」
「それは八百屋さん？」
「違うよ…。」

と答えると吉野巡査は
「この島にある店は八百屋の山内商店と雑貨屋の東商店だけだから東商店の周辺を探してみよう！」
と言い交番の入り口に「ただいまパトロール中」という札を掛け交番を出た。
すみれの家はあっさりと見つかった。「最近このへんに引っ越してきた人はいないか」と聞いたらすぐにわかったのだ。
すみれは無事に家に着き、次の日に達也と遊ぶ約束をして家の中に入った。

番外編４すみれ名端島初上陸！（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第２８話初詣は瑠璃神社へ

四季色列島　瑠璃島　瑠璃神宮

今、ここには初詣に来るためにたくさんの人が来ている。コナンと哀が瑠璃神社に入ると

「あっ！コナン君に哀ちゃん！あけましておめでとう！」

とすみれに声をかけられた。

「あけましておめでとう！すみれ！」

「あけましておめでとう…黒川さん…。」

と言うとすみれの一家とコナン、哀は賽銭箱の方へ賽銭を投げた

（今年は何もなく哀と楽しく過ごせますように…。）

（健康でコナンとずっと一緒に過ごせますように…。）

（えっと…どうしよう…そうだ！哀ちゃんが私の事、黒川さんじゃなくて、すみれちゃんって呼んでくれますように！）

と願いを頭の中で行ってからコナン、哀、すみれの三人でおみくじを引くことにした。

四季色列島　瑠璃島　瑠璃神社　おみくじ売り場前

コナン、哀、すみれがそれぞれおみくじを引こうとすると

「よっ！コナン！すみれ！灰原！あけましておめでとう！」

と言いながら龍城が来た。

「あけましておめでとう！龍城君！」

「あけましておめでとう！龍城！」

「あけましておめでとう…。藤川君…。」

とそれぞれ挨拶が終わると四人はおみくじを引いた。

「ゲッ！凶かよ！」

「あら…小吉ね…。」

「やったー！今年も大吉！」

「中吉か…まあコナンや灰原よりいいからいいか…。」

「何よ…その嫌味な言い方…。」
と灰原が抗議するとコナンが
「お前にだけは言われたくないと思うぞ…。」
と横からいうと哀は
「どういう意味よ！」
と言った。
　そのすぐあとすみれが仲裁に入り喧嘩にはならずコナンと哀はすみれたちと別れ瑠璃神社の中を歩いていた。そしてある角を曲がったときコナンの視界に平次と和葉が入ってきた。二人を見るとコナンは
「やばい！服部と和葉だ！」
と言うと哀の手を引き走り出した。すると
「ちょ！待たんかい！」
と言いながら平次がコナンたちを追って走り出した。コナンと哀が走っていくと道が二つに分けれておりコナンは
「こっちだ！」
と言い左の道へ行き少し行ったところの藪に隠れた。そのすぐ後平次がすぐ横を通り向けた。
「危なかった…こんなところで二人でいるところ見られたらなんていわれることやら…。」
「追いかけられたんだから見られてるじゃない…。」
「そうだな…。」
と言いながら二人は藪を抜けさっさと名端島に帰って行った。

第２８話初詣は瑠璃神社へ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

夏真っ盛りなのにこの小説では新年が明けてしまいました…。

これからもよろしくお願いします。

第２９話名端島餅つき大会

名端島　中央広場

瑠璃島から帰ってきたコナンと哀を始め今この広場に多くの人が集まっている。

「皆様、新年あけましておめでとうございます…。これより新春恒例！名端島餅つき大会！を開催いたします。それでは準備をお願いします。」

と川澄（かわすみ）町長が言うと山内先生と体育委員会顧問の新山（にいやま）先生が餅つきのセットを運んできた。

川澄町長は杵を持つと

「それでは今年が良い年になりますように！」

と言ってから餅をつき始めた。

川澄町長が餅をつき終わった後その場にいた人々が順に餅をつき始めた。

コナン、哀、すみれ、達也、淳史の五人も餅をついて、そのあとに配られた突き立てのお餅を食べ始めた。

「うん！うまいな！」

「やっぱり、つきたてだからかな…。」

「やわらかーい！」

「やっぱりお餅は突き立てに限るわね…。」

「ほんとだな！」

と言いながら五人は配られた餅を食べながら言った。

餅つき大会の後コナンと哀、すみれ、達也、淳史の五人は、阿笠博士の家でお雑煮を食べることになった。

「おまたせ…。」

と言いながら哀がお雑煮を持ってくると待ってましたとばかりにコナンと達也が
「いただきまーす！」
と言って食べ始めた。
「意外とうめーな！」
と達也が言うとすみれが
「そんなに焦って食べなくてもいいんじゃないの？」
と言いながら食べ始めた。

お雑煮を食べ終わるとすみれと達也、淳史は帰って行った。
「元気なものね…。」
と哀がお椀を片づけながら言うと
「そうだな…。」
とコナンは年賀状を眺めながら答えた。
「ねぇ、コナン…。」
「なんだよ…哀…。」
「どう思っているの？」
「どうって？」
と言いながらコナンは顔をあげた。
「こっちに来てからよ…名端島に来てから結構たつけどコナンはどう思ってるの？」
「そうだな…いいところじゃねーのか…ここは…。」
「そうね…。でも、なんだか時々心配になるのよ…あの子たちが元気にやってるか…。」
と哀が言うとコナンは哀の方へ行き
「確かにずっと連絡取ってないもんな…でもあいつらなら大丈夫だよ…。」
と言った。
「そうね…元気にしてるんでしょうけど…。」
「蘭のことか？」

「えぇ…。」
と言うとコナンは少し間をおいてから
「蘭もきっと大丈夫だよ…。」
と言った。
「そうならいいけど…。」
「とにかくあいつらなら心配ないって！」
と言うとコナンは居間へ戻って行った。

第２９話名端島餅つき大会（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第３０話昔の遊び（福笑い・凧揚げ編）

名端島　阿笠博士の家
「おじゃましまーす！」
と言いながらすみれが入ってきた。
「いらっしゃい…。」
と哀が出迎えるとすみれは
「実はさ…福笑い持ってきたんだけどみんなでやらない？」
と言った。それに対し哀は
「いいわね…ちょうど、浅川君や東君も来てるからみんなでやりましょう…。」
と言うと奥へ入って行った。

名端島　阿笠博士の家　居間
「さてと…福笑いを始めましょうか…。」
と哀が言うと淳史が
「ところでさ…福笑いって何？」
と聞いた。するとすみれが
「福笑いっていうのは目隠しをして、その状態で周りの人に、右！とか左！とか言ってもらって顔の形のところに目とか口とかをおいていくんだよ！」
と説明したすると哀が
「ごちゃごちゃ説明するより実際見た方が早いわ…まずは、コナンからやって…。」
と言った。するとコナンは
「あぁ…。」
と答えて目隠しをした…。
「それじゃぁ始めましょうか…。」
と哀が言うとコナンは眉毛のパーツをつかんだ

「そうね…もうちょっと上よ…。」
「あーコナン君！行きすぎだよ！もうちょっと下！」
「そこから左…。」
と言うように哀とすみれの二人に言われながらコナンはどんどんパーツをおいていった。

五分後…
　コナンが目隠しをとると案の定、滑稽な顔ができていた。
「よし！次は淳史やってみろ！」
と言いながらコナンが淳史の目隠しをすると淳史は福笑いを始めた。
それから、達也、すみれ、哀の順に福笑いをし、そのあと外に出て凧揚げをすることにした。

名端島　東の空き地
「よし！やるぞ！」
と言いながら達也が紐を引き出した。
達也が紐を引っ張りながら走ると色鮮やかな凧は徐々に上がって行った。
「すごいわね…。」
と哀が言うとコナンが
「確かにな…。」
と言った。周りを見るとおおくの人が凧揚げや羽根つきなどをしていた。
「まさに正月って感じね…。」
「あぁ…。」
「やっぱりいいわね…ここは…都会と違ってこんな風に遊べるし、みんながせかせかとしてなくて、時間もゆっくりと流れている気がするわ…。」
「そうだな…。」
と二人が話しているとすみれが

「何してるの！コナン君！哀ちゃん！」
と言った。哀は
「今いくわ！」
と答えるとすみれの方へ歩いて行った。
「事件にも遭遇しねーし、本当に平和だよな…。」
とつぶやくとコナンもすみれの方へ行った。

第３０話昔の遊び（福笑い・凧揚げ編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第３１話昔の遊び（羽根つき・すごろく編）

名端島　東の空き地
「次は羽根つきしようか！」
とすみれが言いどこから持ってきたのか羽根つきの道具を出した。
「それじゃぁ…まずはコナン君！私とやろう！」
と言いながらすみれはコナンに羽根つきを渡した。
「それじゃぁ行くよ！」
と言いすみれとコナンは羽根つきを始めた。

十分後…
「はい！今度もコナン君の負けね！」
と言いながらすみれはコナンの顔に墨を塗った。
「コナン…もう顔が真っ黒じゃない…。」
と哀が笑いをこらえながら言った。
「そろそろ哀ちゃんに交代しようか！」
とすみれが言うと哀は羽子板をコナンから受け取り羽根つきを始めた。

さらに１時間後…
　すみれは意外と羽根つきが強くすみれと哀以外の三人（すみれが哀には墨を塗らないと言ったため）は墨で顔が真っ黒になってしまった。
「ねぇ…黒川さん…一旦、私の家に来て墨を流さない？そのあとに家にあるすごろくをしましょう…。」
と哀が言うとすみれは
「そうだね！みんなですごろくしようか！」
と言うとすみれは阿笠博士の家の方へ駆けだした。
「おい！待てよ！」

と言いながら達也が走り出し淳史もこれに続いた。哀も行こうとしたがコナンがどこかを見つめて動かないので
「ちょっと…コナン…どうしたの？」
と話しかけた。するとコナンは
「いや…誰かに見られているような気がしたから…。」
と言った。それに対し哀は
「とりあえず早くあの子たちを追いかけましょう…。」
と言うとすみれたちが言った方へ歩き出した。コナンはもう一度後ろを振り返ると
「気のせい…だったのかな…。」
とつぶやき歩き出した。

名端島　阿笠博士の家
　すみれを除く四人は顔を洗うとすみれが待っている居間へ行った。
「それじゃぁすごろくの順番はじゃんけんで決めようか！」
とすみれが提案すると達也は
「そうだな…それじゃぁ…じゃんけんポン！」

三分後…
「それじゃぁまずは私からね！」
と言うとすみれはサイコロを投げた。
「やった！6だ！1、2、3、4、5、6！次は達也だよ！」
「よし…行くぞ！」
と言うと達也もサイコロを投げた。
「なんだ…1かよ…。」
と言いながら駒を一マス進めた。
　そのあと哀、淳史の順に投げコナンの番が来た。
「やっと俺の番だ！」
「相変わらずじゃんけん弱いのね…。」
「とにかく投げるぞ！」

と言うとコナンはサイコロを投げた。
「5だ！ラッキー！」
と言いながら駒を進めるとそこには「一回休み」と書かれていた。
「マジかよ…。」
とコナンが言うとすみれがサイコロを投げた。

三十分後…
すごろくはすみれが一位で、淳史が二位、哀が三位、達也が四位、コナンが最下位と言う結果に終わった。
「さすがの探偵さんもこういうことには弱いのね…。」
と哀が言うとコナンは
「お前らはともかく羽根つきにしてもすごろくにしても強すぎるぞ、あいつ…。」
と言いながらすみれの方を見た。
「確かにそうね…。」
と言うと哀もすみれの方を見た。

第３１話昔の遊び（羽根つき・すごろく編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第３２話昔の遊び（かるた取り編）

名端島　阿笠博士の家
「次はかるた取りやろう！」
とすみれが提案するとコナンが
「いいな！哀、家にかるたあったけ？」
と聞いた。
「えぇ…あったわよ…。」
と答えると哀は奥にかるたを取りに行った。

数分後…
「あったわよ…。」
と言うと哀は絵札を並べ始めた。
「それじゃぁ、じゃんけんで負けた人が読む人ね！」
とすみれが言うと達也が
「それじゃぁいくか…じゃんけーんポーン！」
と言いじゃんけんをした。その結果、案の定コナンが読み札を読むことになった。
　コナンが読み札を持って
「それじゃぁ行くぞ…って灰原これ変わったかるただな…。」
と言った。
「そうね…これ、私が作った手作りのかるたですもの…。」
「おめーもそういうことするんだな…。」
とコナンが言うと哀はコナンを睨み付け
「悪い？」
と言った。
「でもよ…これはちょっと…。」
「このかるたを作ったときはみんなそこに書いてある通りのはずよ…。」

と言うとコナンは
「いつ作ったんだよ…このかるた…。」
「おととしの冬休みよ…阿笠博士に作ってみたらどうじゃ？って言われて作ったのよ…。」
「おととしって言うと一年生の時の冬休みか…それだったら外れてはいないけど…。」
と言った。するとすみれが
「どういうこと？」
と聞いた。するとコナンは
「読めばわかるよ…たぶん…それじゃぁ一枚目…こ！コナンも歩けば事件にあたる！」
と読み札を読み上げた。すると
「はい！」
と言いながら達也が「こ」と書かれた絵札を取った。
「次、か！陰でメタボる阿笠博士。」
とコナンが読み上げると横で聞いていた阿笠博士が
「何を言うんじゃ！」
と言った。コナンが
「哀が作ったかるたなんだからあいつに文句言えよ…。」
と言っている間にすみれが絵札を取っていた。
その後も「ウナギ大好き元太君」や「いつもかわいい歩美ちゃん」などもあったが、「ヘッポコ刑事の山村さん」や「刑事より犯人顔の大和警部」など本人が聞いたら怒りそうな内容のものや、「ドジな本堂瑛佑」や先ほどの「コナンも歩けば事件にあたる」など文句の言えないような嫌味まで多々あった。

とりあえずコナンが読み札を全部読み終えるとそれぞれ取った絵札の数を数えた。
結果はすみれが一位、哀が二位、淳史が三位、達也が四位だった。
「やった！一位だ！」

とすみれが言うと哀が
「もう一回やる？」
と聞いた。するとすみれが
「実はかるたも持ってきてたのよね！」
と言いながらごく普通のかるたを取り出した。
「なんだよ…持ってたのかよ…。」
とコナンが言うとすみれは
「ごめんね…。」
と言った。
「とりあえず始めるか！」
と達也が言いふたたびかるた取りを始めた。

第３２話昔の遊び（かるた取り編）（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

かるたの内容でひどい扱いを受けている人がいましたがその人が嫌いとかではありません。

あと、阿笠博士のところと大和警部のところが「か」で重複していたので訂正しました。

これからもよろしくお願いします。

第３３話冬休みを終えて

名端島　名端小学校　体育館
「これで第３学期始業式を終わります。」
と司会の先生が言うと各担任の先生と児童たちは体育館を出た。

名端島　名端小学校　２年１組
　一番最後に歩いていたコナンと哀が席に座ると山内先生が
「冬休みの宿題を集めるぞ！」
と言うとクラスのみんなは名簿番号順に前に出て宿題を提出し始めた。全員が宿題を提出したのを確認すると山内先生は
「みんな、新年あけましておめでとう！」
と言った。
「あけましておめでとうございます！」
「みんな元気だな。早速だが、明日の書初め大会の説明をする。」
と言いながら「かきぞめたいかいについて」という題名が書かれたプリントを配りだした。プリントを配り終えると
「明日の書初め大会だが、そのプリントに書いてある通り筆と墨は学校で用意するから、みんなは汚れてもいい服で来てくれ。」
と言った。
　そのあとみんなが一人ずつ冬休みの思い出を発表した。内容は、ほぼ全員がロンドンに行ったことであったが…。

　学校が終わるとすみれや達也と遊ぶ約束をして一旦家に帰ることにした。
「そういえばさ…あのかるた歩美ちゃんとか元太君とか書いてあったよな…。」
とコナンが言うと哀は
「えぇ…吉田さんのと小嶋君のと円谷君のは阿笠博士が見本として

作ったやつだから…。」
と言った。するとコナンは
「そーゆーーーことかよ…。」
と言った。

次の日…
名端島　名端小学校　２年１組
「今から新春書初め大会を始める。書くのは今年の抱負…つまり目標だ！それじゃぁ始め！」
と山内先生が言うとみんな一斉に何かを書き始めた。

１時間後…
「それじゃぁ一人ずつ発表するぞ！」
と山内先生が言うとまずは達也が前に出て
「俺の今年の目標は…テストで百点取ることです！」
と言うとすみれは
「それじゃぁ家で勉強するんだね！」
と言った。すると達也は黙り込んでしまった。

そのあとコナンの「今年発売の推理小説を全部読む」とか、すみれの「友達がもっと増えますように」とか、哀の「今年は一切事件に巻き込まれませんように」など個性豊かな抱負が発表された。

名端島　海岸沿いの道
学校を終えたコナンと哀が家を目指して歩いている。
「みんな個性的なこと書いてたな…。」
とコナンが言うと哀は
「えぇ…。」
と短く答えた。
「ところでよー哀…今年の本当の抱負とかあるか？」

とコナンが聞くと哀は立ち止まって振り返り
「そうね…あなたの事件吸収体質が復活しませんように…かな…。」
と言うと再び歩き出した。
「待てよ！哀！」
と言いながらコナンがそれを追いかける。

いよいよ3学期、新学年へ向けて準備が始まった。

第３３話冬休みを終えて（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

前回登場したかるたの完全版を「哀のかるた」という題名で投稿しました。

よろしければ読んでください。

これからもよろしくお願いします。

番外編5淳史と真奈美の初詣

名端島　名端神社　階段

　名端神社は名端島の一番高いところにあるがたいていの人は瑠璃島にある瑠璃神社へ行っている。
だが、淳史の同級生の久坂真奈美（くさかまなみ）があえてあまり人がいないところで初詣がしたいといったので名端神社に初詣に来た。
「はぁ…やっぱりここの階段きついね…。」
と真奈美が言うと淳史は
「やっぱりすみれたちと一緒に瑠璃神社に行った方がよかったんじゃねーか？」
と言った。
「いいのよ…だって淳史と二人が良かったんだもん…。」
と真奈美がボソッと言うと淳史は振り返った。
「今なんて言ったんだ？よく聞こえなかったけど…。」
「い、いや、なんでもないから気にしないで！」
と真奈美が言うと淳史は
「そうか？」
と言うと再び階段を上りだした。

名端島　名端神社　境内
「さてと…お参りするか…。」
と淳史が言うと真奈美は１０円玉を取り出した。
（今年も楽しく過ごせますように…。）
と淳史が願い事をすると真奈美を終わったようなので二人でおみくじを引くことにした。
　おみくじを引くと淳史は末吉がでた。
「俺は末吉だけど真奈美は？」
と淳史が聞くと真奈美は

「私は中吉だったよ。」
と言った。

それから境内を少し歩いた後二人は階段を下り家に向かっていた。
すると
「あっ達也君に真奈美さん！」
とすみれに声をかけられた。
「よーすみれ！」
と達也が声をかけた。
「淳史君たち初詣に行ったの？」
「なんか、真奈美が名端神社がいいって言うから名端神社までな…。
」
「名端神社か…ふーん…。」
とすみれが言いながら真奈美を見ると真奈美は
「何よ…すみれちゃん…。」
と言った。
「まっいっか…二人の邪魔しちゃ悪いし…。」
と言うとすみれは去って行った。
「何言ってんだ？あいつ…。」
と淳史がすみれの後姿を見ながら言うと真奈美はため息をついた。
（まったく…淳史ったら…。）
「真奈美行こうぜ！」
と淳史が言うと真奈美は
「今いく！」
と言って淳史を追いかけた。

淳史に家まで送ってもらい家に帰って自分の部屋に来た真奈美は
日記を付け始めた。

1月1日　晴れ

今日は淳史と名端神社へ初詣に行った。そして…

日記を付けながら真奈美は
（名端神社に二人で初詣に行くとそのカップルは結ばれる。なんてお母さんが言っていたけど本当なのかな…。）
と思っていた。

数日前…
名端島　真奈美の家
「真奈美…今年の初詣は淳史君といくの？」
「そうだけど…。」
とすみれが答えると母は
「だったら名端神社にしなさい！」
と言った。
「どうして？」
「実はね…名端神社に二人で初詣するとそのカップルは結ばれるっていう言い伝えがあるのよ…最近はあまり知っている人いないけどね…。」
と言うと母は買い物に出かけた。

番外編5淳史と真奈美の初詣（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

番外編6すみれの姉

名端島　名端小学校　６年１組
「ねぇ…綾子…。」
と友人の生野凛（いくのりん）に話しかけられ黒川綾子（くろかわ あやこ）は顔をあげた。
「何？凛…。」
と綾子が言うと凛は
「明日の書初め大会なんだけど、何を書くか一緒に考えてくれない？」
と言った。
「いいけどさ…一緒に考えるって言ったって凛の分まで考えないよ…。」
と綾子が言うと凛は
「も、も、もちろんそうに決まってるじゃなーい…こ、今年は、じ、自分の分ぐらい、自分で考えるよ…あはははは…。」
と言った。それを見て綾子は
（私に考えさせるつもりだったな…。）
と思っていた。

名端島　綾子の家
　家に帰ると
「お帰りお姉ちゃん！」
と今日は始業式で帰る時間がいつもより早いからかいつもは遊びに行っていて綾子が家に帰るときにはいないすみれが出迎えてくれた。
「ただいま…すみれ…。」
と綾子が言うとすみれは
「それじゃぁお母さん遊びに行ってくるね！」
と言うと母が
「日が沈むまでに帰ってくるのよ！」

と言ってるのを聞いているのかいないのかそれに対して返事をせずに家を飛び出した。
（相変わらずね…。）
とすみれの背中を見ながらため息をつくと綾子は母に今日凛が来ることを伝え自分の部屋に入った。

自分の部屋にしばらくいると凛がやってきた。
「さてと…綾子は何がいいと思う？」
と凛が言うと綾子は
「やっぱり抱負っていうぐらいだからしっかりした目標じゃないとね…。」
と言った。すると凛は立ち上がり
「決めたわ！友達をたくさん作る！とかは？」
と言った。すると綾子は
「それ去年すみれが言ってたよ…たぶん今年も同じだろうし…。」
とやや呆れながら言った。
「じゃぁ宇宙人と友達になる！」
「あのね…宇宙人なんかいるわけないでしょ…。」
「じゃぁ今年中に中学生になる！」
「別に何してようが、４月からは自動的に中学生よ…私たち…。」
と綾子が言うと凛は頬を膨らませ
「じゃぁどうすればいいのよ！」
と言った。
「そうね…たとえばテストで百点取るとか…そんな感じかな…。」
と綾子が言うと凛は綾子の手を握り
「ありがとう！綾子！それじゃぁ私今年はそれにする！じゃぁ私帰るね！」
と言うと凛は帰って行った。
凛が飛び出していった扉を見ながら綾子は
（しまったー今年も結局私が考える羽目になってしまった…。）

と思っていた。

次の日…

今年はテストで百点取ると発表した凛が発表すると同じころ別のクラスで同じ内容の事を発表して同級生の女の子に痛い一言を言われたのとは違い、何言ってんだ？こいつ…みたいな空気が流れた。

そんな様子を見て綾子は

（あんなこと言わなくてよかった…。）

と胸をなでおろしていた。

番外編６すみれの姉（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回から新章突入です。

これからもよろしくお願いします。

第３４話探偵団結成の理由

名端島　名端小学校　２年１組
「今日も中央広場に集合ね！」
とすみれが言うとコナン、哀、達也はそれぞれ返事をして教室を後にした。

名端島　海岸沿いの道
「ねぇ…コナン…。」
と哀に言われコナンは立ち止まった。
「なんだよ…哀…。」
とコナンが言うと哀は
「そういえば…すみれ、どうして突然探偵団やろうなんて言ったんだろう？」
と言った。
「今頃何言ってるんだよ…子供が考えることだからかっこよさそうとかそういうのじゃないのか？」
「でも…何かきっかけがあるような気がするわ…何かにあこがれてとかいうときはそういうようなことを言うはずよ…私たちも吉田さん達について少し話したけどその話を聞いてってことならその場で言いだすだろうし…。」
と哀が言うとコナンは
「確かにそうだな…とりあえず本人に聞いてみるか…。」
と言った。

名端島　中央広場
「わりー遅くなった！」
と言いながらコナンが広場に来ると哀はすでに広場に到着していた。
「まったく…哀おいていくなよ！」

とコナンが言うと哀は
「だってあなたを待っていたら私まで遅れちゃうでしょ…。」
と言った。
「おめーな…。」
とコナンが言うが哀はそれを無視してすみれに
「ねぇ…少し前から気になっていたんだけど、少年探偵団を作った理由教えてくれないかしら…。」
と言うとすみれは
「言ってなかったけ？」
と言った。哀が半ばあきれながら
「一度も聞いてないわよ…。」
と言った。
「えっとね…そうだ！あれは探偵団を結成する前日に殺人事件に遭遇したの！それでねコナン君たちが言っていた探偵団が解決したの！それをみてかっこいいなーって思って！」
と言い事件の詳細を説明した。すると哀はコナンを見て
「なるほど…結局貴方の事件吸収体質はあの子たちに引き継がれたわけね…。」
と言った後
「ということはあの子あれを見たのかしら…。」
とつぶやいた。コナンが
「あれってなんだよ？」
と言うと哀は
「何でもないわ…。」
と言った。

名端島　海岸沿いの道
「それにしても…名端（こっち）島の探偵団と米花（あっち）町の探偵団にあんなかかわりがあったとわな…。」
とコナンが言うと哀は

「まっ正確に言うとこっちの探偵団ができるきっかけを作ったのがあの子達ってわけね…。」
と言った。
「それにしてもよー少し気になることがあるんだけど…。」
とコナンが言うと哀は立ち止まり
「何？コナン…。」
と言った。
「お前が言ったあれってなんなんだよ…結局…。」
とコナンが言うと哀は
「そうね…あなたが知る必要はないわ…。」
と言うと再び歩き出した。
「おい！待てよ！哀！」
と言うとコナンは哀を追いかけ始めた。

第３４話探偵団結成の理由（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

哀ちゃんが言っていた「あれ」は「米花町より」で９月６日に投稿する第１１話に登場します。

これからもよろしくお願いします。

第３５話終わりを告げに来たもの

名端島　阿笠博士の家

今この家にはＦＢＩ捜査官のジョディと赤井が訪ねてきている。

「それでジョディ先生に赤井さん…どうしたの？急にこんなところまで…。」

とコナンが言った。

「例の組織の事よ…あの組織の幹部は全員逮捕で来たわ…でも…。」

「でも？」

「あの組織は巨大すぎて組員をすべて逮捕できないでいるのよ…組織の残党が新しい組織を作ったって話も聞いてるし…。」

とジョディが告げると哀は

「つまり…幹部は逮捕したけど気を抜くなってことね…。」

と言った。

「えぇ…とわいってもあなたの事達の事を知っているのは幹部たちだけだったようだから大丈夫だとは思うけど…。」

とジョディが言うと哀は

「まっどちらにせよ油断ならないわね…話はそれだけかしら？」

と言った。するとジョディは

「それと後組織のボスの事なんだけど…。」

と言った。

「わかったの！」

「えぇ…あの組織のボスは…存在しなかったわ…。」

「存在していない？」

「正確に言うとあの組織の人間は約半世紀前からある人物の復活が目的だったの…その人物が…」

「あの組織のボス…。」

とコナンが言うとジョディは

「その通りよ…その過程で出来たのがＡＰＴＸ４８６９…。」

と言った。
「なるほど…つまりＡＰＴＸ４８６９のように細胞の自己破壊プログラムのように細胞に直接働きかけるような薬を作っていたのはそういうわけだったのね…。」
と哀が言うと赤井が
「あぁ…大体そんなところだろう…。」
と言った。
「ところであの組織の人間がそこまでして復活させたかった人物とは何者なんじゃ？」
と阿笠博士が言うと赤井は
「それはよくわからない…その人物の忠実な部下で本来の目的を遂行するために動いていた宮野夫婦やピスコといった人物はもうこの世にいないから調べようがない…。」
と言った。
「なるほど…つまりその人物の復活のために動いていたのが徐々にあんな犯罪組織になっちまったってことか…話はそれだけ？」
とコナンが言うと
「えぇ…話はこれだけ…何かあったら連絡するわ…。」
とジョディが言うと二人は帰って行った。
二人が帰ると哀は
「ねぇ…コナン…組織の残党ってほっといても大丈夫よね…。」
と言った。するとコナンは
「バーロー…今頃何言ってんだよ…それに何かあったらぜってーにお前にこと守ってやるから…。」
と言った。

二人が話をしているとすみれと達也がやってきた。
「ねぇ…哀ちゃん…今哀ちゃんの家の方から来た外国人の女の人と怪しい男の人だれ？」
とすみれが聞いた。おそらく名端島の観光客は港の周辺や北部を回

るので阿笠博士の家の方へ来ることあまりないからであろう。すみれの質問に対し哀は
「ちょっとした知り合いよ…。」
と答えた。するとすみれは
「そうなんだ…。」
とつぶやいた。

第３５話終わりを告げに来たもの（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

組織のボスの実態がないのは原作の登場人物のうち誰がボスだというような展開があまり好きではなかったからです。

これからもよろしくお願いします。

第３６話東京観光ツアー（出発前）

名端島　名端小学校
「ねぇ…哀ちゃん、コナン君、達也…。」
とすみれが話しかけると三人は
「何…黒川さん…。」
「なんだよ…すみれ…。」
「どうかしたのか？」
とそれぞれ答えた。するとすみれがポケットからチケットを取り出して
「見てみて！福引で東京観光ツアーって言うのが当たったんだけど一緒に行かない？」
と言った。三人が
「別にいいわよ…。」
「行こうぜ！もちろんコナンも行くよな！」
「わーたよ…行くよ…。」
と返事をするとすみれは
「わかった！じゃぁ後…淳史と山内先生は誘ったから…」
と言っていると明日香が教室に入ってきた。するとすみれは明日香の方へ行き
「明日香！実は福引でね…」
と先ほどコナンたちにしたような話を始めた。その様子をみて哀は
「今度は何人分当たったのかしら…。」
とつぶやいた。

学校が終わるとコナン、哀、達也の三人はすみれのところに行った。哀が
「ねぇ…黒川さん…さっき言ってたチケットって何枚当たったの？」
と聞いた。するとすみれは

「えっと…１０枚かな…。」
と言った。
「あら…前回の半分なのね…つまり、今回行くのは黒川さんの家族４人と私とコナン、浅川君、東君、山内先生、西宮さんの１０人ってわけね…。」
「そうだよ！今日も中央広場に集合ね！」
と言うとすみれは家に向かって歩き出した。

名端島　中央広場
「やっぱり今日もコナンが遅かった！」
と達也が言うとコナンは
「だから…いつも言ってるけど家が遠いんだって…。」
と言った。
「でも灰原は先についてるぞ。」
「あいつ…やりやがったな…。」
「なにか言った？」
「いや…別に…。」
とコナンが言うとすみれは
「ところでさーいつも福引してると前の人も後ろの人もポケットティッシュとかお菓子とかもらってるのよね…あれってなんかほしくなるよね…。」
と言った。すると哀は
「黒川さん…それ嫌味なの？」
と言った。
「おめーにだけは言われたかないと思うぞ…。」
とコナンが横からいうと哀はコナンの方を向き
「何か言ったかしら…。」
と言った。するとすみれが
「そんなことより！今日は珍しく私たち少年探偵団に依頼がきたから…」

と言った。すると達也は
「本当かよ！それでどんなモノ好きからの依頼だ？」
と言った。
「依頼主は４年１組の浅川匠君（あさかわたくみ）からで…内容は島のどこかで落とした百円を探してほしいっていう内容よ…。」
とすみれが言うと達也が
「なんだよ…兄ちゃんかよ…百円って…。」
と言った。
「とにかく探しに行くよ！」
「ちょっと！すみれ！」
そのあと二時間ほど百円を探したが当然見つからなかった。

第３６話東京観光ツアー（出発前）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第３７話東京観光ツアー（一日目）

東京　東京駅

東京観光グルメツアーは金・土・日の三日の予定で集合場所の東京駅に名端島から来たすみれ達一行１０人を含む今回の参加者２０名が集合場所である東京駅前に集まっていた。

「東京観光ツアーにご参加の皆様。こちらへ来てください！」

と言いながらガイドらしき女の人が旗を振るとみんなはそっちへ向かった。

女の人について行きバスに乗り込むと女の人が

「本日は東京観光ツアーへのご参加ありがとうございます。担当乗務員をご紹介します。運転士は山上（やまがみ）、ガイドはわたくし池川（いけがわ）がご案内いたします。まず、このバスは浅草へと向かいます。なお、安全には気を付けて運転しておりますが、走行中やむを得ず急停車する場合がございますのでシートベルトをしっかりとお締めになるか、席に深くお座りくださいませ。車内事故防止にご協力ください。」

と池川が言うとバスが発車した。

バスはゆっくり時間をかけて浅草へ向かった。

東京　浅草　雷門前

「皆様！今から2時間自由時間です。午後6時にもう一度この場所に集合してください！」

と池川が言うとツアーの参加者たちはそれぞれ何人かに分かれて歩き出した。コナンと哀は二人で仲見世通りを歩くことにした。

東京　浅草　仲見世通り

「それにしても、このツアー鈴木財閥の関連企業の企画だったなん

てね…。」
と言いながら哀は手元のパンフレットを見た。そのパンフレットの裏には「ＳＵＺＵＫＩ」の文字があった。
「確かにな…まっだからと言って園子と会うわけでもないけどな…。」
とコナンが言うと二人は仲見世通りの店でお土産を買ったりしながら浅草寺へ向かった。
　二人が浅草寺へ向かっている途中向こうの方から見たことのあるような人影が見えていた。
「あなたね、食べてるばかりでここまで何をしに来たか忘れたんじゃないの？」
と女性が言うと横にいた男の子は
「いいじゃねーかよ…別に…。」
と言った。
「間違いないわ…やっぱり小嶋君と園子さんね…一旦脇道に入りましょう…。」
と哀が言うと二人は脇道に入った。

数分後…
「二人とも行ったみたいね…。」
と哀が言うとコナンは
「ところで何であの二人が浅草にいるんだ…。」
と言った。
「それ以前になんであの二人なのかしら…。」
「さぁな…名端島へ引っ越してからもう半年近くになるから、人間関係も変わってるんじゃねーか…。」
とコナンが言うと哀は
「そうね…それより早く浅草寺へ向かいましょう…。」
と言いながら歩き出した。

第３７話東京観光ツアー（一日目）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第３８話東京観光ツアー（二日目）

東京　ホテル前
「皆様、今日は一日自由行動です。なぉお手元の冊子にも書いてありますが本日分の交通費等はお客様自身でお出しいただけるようお願いします。」
と池川が言うとツアー参加者は様々な方向へ歩き出した。
「ツアーなのに一日自由行動って変わってるわね…。」
と哀が言うとコナンは
「そうだな…。」
と答えた。

東京　東都タワー　展望台
　エレベーターの扉があくと
「すごい景色！」
と言いながらすみれが飛び出して行った。
「久しぶりに来たわね…展望台まで来るのは初めてだけど…。」
と哀が言うとコナンは
「そうだな…。」
と答えた。
「それにしてもあなたがここに来たときって確か、連続爆弾事件の時とアイリッシュの事件の時ぐらいだったかしら…それ以外に行ったとしても事件関連でしょ…。」
「悪かったな…。」
というような会話をしながらコナンと哀はエレベーターから降りた。
　事件抜きで東都タワーに上るのは初めてだったので何度か登ったことのあるコナンも展望台から見える風景にも取れていた。

東京　東都タワー　受付前

「次はどこに行く？」
とすみれが聞くと達也は
「そうだな…せっかくだからお台場行こうぜ！」
と言った。
「そうだな…悪くはないかもな…。」
とコナンが言うとすみれとすみれの母、達也、淳史、コナン、哀の六人はお台場に行くことにした。

東京　お台場　お台場海浜公園駅
「お台場に着いたはいいけど…。」
と達也が言うとコナンは
「雨だな…。」
と言った。

お台場一帯に近づいたとき…大体レインボーブリッジを渡りだしたあたりから雨が降り出していた。
「これじゃぁお台場の散策は難しいかもしれないわね…テレビ局は明日行く予定だし…。」
と哀が言うとすみれの母が
「だったら別のところに言ったらどうかしら？たとえば…六本木ヒルズとか見てみたいわ！」
と言った。
「そうだね！お母さんの言う通り六本木に行こう！」
とすみれが言うと結局六人はほとんどお台場を巡ることもなくふたたびゆりかもめに乗車した。

そのあと一行は六本木、築地、上野などに行き結局一日目同様浅草に来ていた。

東京　浅草　仲見世通り

「やっぱりここなんだな…。」
「えぇ…単純に考えれば浅草と言えばここよね…。」
と後ろでコナンと哀が話しているが前を歩いている達也とすみれは気にしていないようだ。ちなみにすみれの母と淳史は淳史が体調を崩したため一足先にホテルの戻っている。
「コナン君！哀ちゃん！早く行こう！」
「今いくわよ！」
と哀が答えるとコナンと哀は二人の方へ歩いて行った。

第３８話東京観光ツアー（二日目）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

お台場で雨でテレビ局も明日行く予定で、六本木に行こうか！というような部分は僕が修学旅行へ行った時の実話をもとにしています。

これからもよろしくお願いします。

第３９話東京観光ツアー（最終日）

東京　バス車内
「右手に見えますのが東都スカイツリーでございます。東都スカイツリーは…」
というような説明を聞きながらコナンと哀は窓から見える車窓を眺めていた。前日体調不良で先にホテルに帰った淳史は朝元気だったのだが大事を取ってすみれの母とホテルで休んでいる。
「すごーい！」
「ほんとだな！」
という風にはしゃいでいる達也とすみれを見てコナンは
「あいつら淳史の事気にしてねーようだな…。」
とつぶやいた。すると哀が
「まっ朝あんなけ元気ならね…。」
と言った。

朝
東京　ホテル　ロビー
「何で行っちゃダメなんだよ！」
と淳史が言うとすみれの母は
「ダメよ…また、ぶりかえしたら大変だから…。」
と言った。
「俺は大丈夫だから！」
「そーだよ！お母さんの言う通り今日は休んだら？」
とすみれに言われ達也は
「わかったよ…。」
と答えホテルにすみれの母と共に残ることになった。

東京　お台場　テレビ局前

「これからテレビ局の中を見学しますのでしっかりとついてきてください！」
と池川さんが旗を振りながら言うとツアーの参加者はそれに続いた。

東京　バス車内
　テレビ局の見学を終えた後バスは明治神宮へ向かっていた。
「テレビ局すごかったね！」
とやや興奮した様子のすみれが言った。すると達也が
「でも、アイドルとか会えなかったな…。」
つぶやいた。すると後の席に座っていた明日香が
「そう簡単に会えるわけないでしょ…。」
と言った。

東京　上野　上野動物園　入口
「皆様！ただ今より上野動物園内で自由時間とさせていただきます。三時間後にこの場所に集合でございます。」
と池川が言うとコナンと哀は二人で上野動物園を散策することにした。

東京　上野　上野動物園　東園
　哀とコナンは動物園に入るとまずはパンダを見てそれから様々な動物を見ていた。鹿にゴリラ、ライオン、象など上野動物園には様々な動物がいるが哀の動物好きは組織壊滅後前よりもすごくなったのでどの動物を見ているときも話しかけづらい…というかその姿を見てコナンがかわいいな…なんて思いながら見ていたためあまり園内をすべて回る前に集合時間になってしまった。

　その後バスは解散場所の東京駅に着いた。
「皆様！東京観光ツアーへの参加ありがとうございました。当社ではこのツアーのほかにもさまざまなツアーをお客様に提案しており

ます。またのご利用をお待ちしております。」
と池川が言うとツアーに参加していた人たちは次々とバスを降りだした。

コナンと哀、すみれ、達也、淳史、明日香、はバスを見送った後、名端島へ帰って行った。

第３９話東京観光ツアー（最終日）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第４０話探偵団の猫さがし

名端島　名端小学校　校庭
「楽しかったね！東京！」
とすみれが言った。そのあと達也が
「そうだな！特に最後に行った上野動物園なんか…」
と言いかけたが
「そうなんだ…やっぱり最終日楽しかったんだ…。」
と言いながら後ろから淳史がやってきたため話を途中でやめた。
「そういえばもうすぐ二月だよな…卒業生を送る会で何をするんだろ…今年は…。」
と達也が言うとすみれは
「もうすぐ山内先生が教えてくれるんじゃないの？」
と言った。達也は
「そうだな…。」
と答えるとチャイムが鳴りみんな教室に戻って行った。

名端島　中央広場
「さっそくだけど少年探偵団に依頼が来たんだけど…」
とすみれが言うと達也が
「今月だけで二つか！なんだか多いな！」
と言った。達也の言う通り名端小学校の少年探偵団への依頼は月に一つあればいい方なのである。
「えっと内容は…１年生の新名彩（しんなあや）さんからで…迷子になった猫を探してほしいって内容よ…。」
と言った。
「特徴は？」
と達也が言うとすみれは
「今から聞きに行くわよ！」

と言って彩の家へ向かった。

名端島　彩の家

「それでさっそくだけど迷子になった猫ってどんな特徴があるの？」

と哀が聞くと彩は

「ミケって言う名前で白と茶色の縞々の体で首に鈴をつけてるの…。」

と言いながら写真を出した。

「この子ね…。」

と哀がつぶやくとすみれは

「この写真借りていい？」

と言った。彩がうなずくと五人と彩は家の外へ出た。

五人と彩は彩の家を出た後、手分けして漁港や学校、洞窟の近くなどを探したが見つからなかったので次は神社の方へ行くことにした。

名端島　名端神社

「なかなか見つからないね…。」

と達也が言うとすみれは

「この島そんなに大きくないから簡単に見つかると思ったのに…。」

と言った。

「とにかく探そうか！」

とすみれが言ったその時

「ニャー」

と猫の鳴き声がした。

「あっ！いた！」

とすみれが言いながら近づくと子猫は後ろに下がり警戒するような体制をとった。すると後ろから彩が来て

「ミケ！」

と言うと猫は彩の方へ歩いて行った。彩は駆け寄り猫を抱くと
「よかった…ミケ…心配したんだよ…。」
と言ってからすみれたちの方を向き
「ありがとう！みんな！」
と言うと猫を抱いたまま神社の階段を下りて行った。哀は彩の後姿が見えなくなると
「今月、二件目にして初めて依頼達成ね…。」
と言った。
「兄ちゃんの依頼はいくらなんでも無理があったって…。」
と達也が言うとすみれが
「もうこんな時間！早く帰らないと怒られちゃう！」
と言いながら走り出した。
「俺も帰らなくちゃ！」
「ほんとだ！」
と言いながら達也と淳史が去って行くとコナンと哀は
「私たちも帰ろうか…。」
「そうだな…。」
というような会話をして家に向かって歩き出した。

第４０話探偵団の猫さがし（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

自分でこれまで投稿した分の話を読み返してみたら一部不自然な部分があったため訂正しました。

これからもよろしくお願いします。

番外編7その頃の名端島（前編）

コナンや哀、すみれ、達也たちが東京へ行っている頃
名端島　中央広場
「今回は誘われなかったね…。」
と春香が言うと光が
「仕方ないよ…いくらすみれちゃんだからってそんな都合よくたくさん当たるわけないし…っていうか十人分でもすごいと思うけど…。」
と言った。
「でも、私は二年一組じゃないしすみれさんともそこまで仲良くないからロンドン行くときも誘われなかったよ…。」
と真奈美が言うと凛は
「それならまだいいよ…私なんか話を聞いて綾子にロンドンに行きたいって言ったのにすみれが友達をたくさん誘ったから無理！なんて断られたし今回だってすみれがたくさん友達を誘って…なんて感じに断られたんだから…。」
と言った。
「それはきついね…。」
と明が言うと凛は
「そうだよ…。」
と弱弱しく答えた。すると真奈美が凛の肩をたたきながら
「大丈夫だよ！きっと今度は誘ってくれるから！」
と言った。

名端島　名端小学校　職員室
「葛原先生…山内先生はどこにいますか？」
と生野先生に聞かれ葛原先生は
「山内先生なら今日はいませんよ…。」

と答えた。
「そうですか…。」
と生野先生が言うと横から5年1組担任の日渡茂延(ひわたりしげのぶ)先生が
「確か東京でしたよね。」
と言った。
「東京へ行ってるんですか？」
と生野先生が聞くと葛原先生は
「あれ？聞いてないの？山内先生は2年1組の黒川さんが当てたチケットで東京へ行ってるのよ…。」
と言った。すると生野先生は納得したように
「あーそれで黒川先生もいないんですね！」
と言った。それを見た氷川豊教頭(こおりがわのる)は
「それにしても黒川先生のくじ運もかなりのものだがその娘のすみれちゃんはその上を行くな…。」
とつぶやいた。
「教頭！私達職員で職員旅行でも行きませんか！」
と葛原先生が言うと氷川教頭は
「そうだな…岡垣(おかがき)校長にでも相談してみるか…。」
と言いながら校長室へと向かった。

数十分後…
氷川教頭が校長室から出てくると葛原先生は
「どうでした？」
と聞いた。すると氷川教頭は
「職員旅行の件だがあまり遠くは無理だが検討してくださるそうだ…。」
と答えた。生野先生が
「やった！それでどこに行きましょうか？」
と言うと氷川教頭は
「確かに検討はしてくれるそうだが私たちだけで勝手には決められ

ないよ…。」
と言った。
「そういえばそうですね…。」
と生野先生が答えると横で話を聞いていた6年1組担任の柏原杏子(かしわばらあんず)先生が
「仮に職員旅行に行くとしても誰か一人は学校に残らないといけないけどどうするの？」
と言った。
「そういえばそうですね…。」
と生野先生が言うとみんな黙ってしまった。

番外編7その頃の名端島（前編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

主要キャラが登場しない関係で新キャラ・一回だけの登場でそれ以降でていない人物などがたくさん出ています。次回も新キャラや一回だけしか登場していない人物が出てくると思います。

これからもよろしくお願いします。

番外編8その頃の名端島（後編）

名端島　名端小学校　職員室

「それにしても山内先生と黒川先生よくあっちこっち行けていいですね…。」

と葛原先生が言うと4年1組副担任の野々川洋介（ののかわ　ようすけ）先生が

「確かにそうですね…僕は副担任として見ていても黒川先生のご家族のくじ運はおどろかされます。」

と言った。

「少し分けてほしいぐらいだわ…。」

と生野先生が言うと

「すいません、生野先生。動物の飼育小屋の掃除終わりました！」

と正英が生野先生に話しかけた。生野先生が振り向くと正英と龍城、由紀が立っていた。

「それじゃぁちゃんとできているかチェックしていい？」

と生野先生が聞くと由紀は

「ちゃんとやったから大丈夫だよ！優太や守も待ってるから早くして！」

と言った。

「それじゃぁ私は行ってきます！」

と言うと生野先生は職員室を出て行った。

名端島　名端交番

吉野巡査が立っていると

「吉野さん…こんにちは…。」

と言いながら嘉子がやってきた。

「嘉子さんこんにちは！」

と吉野巡査が答えると嘉子は

「ちょっとそこで財布を拾ったもんできただけど…。」

と言った。すると吉野巡査が
「そうですか！こっちに来てください。」
と言いながら嘉子を交番の椅子に座らせた。一通り手続きを済ます
と吉野巡査が
「そういえば息子さん今東京にいましたよね？」
と言った。
「そうなんですよ…黒川さん所の娘さんが当てたチケットで行ってるんですよ…。」
と少しトーンを落として言った。
「どうかしたんですか？」
と吉野巡査が聞くと嘉子は
「淳史（あの子）は昔から少し体が弱いから向こうで風邪でも引いてなきゃいけど…。」
と言った。
「きっと大丈夫ですよ！山内先生や黒川さん所にご家族がついているんですから。」
と吉野巡査が言うと嘉子は
「そうですよね…。」
と言って交番を後にした。

名端島　中央広場
　春香や光、明、凛、真奈美が話していると
「ごめん…正英たちがちゃんと掃除しないから時間がかかっちゃった…。」
と言いながら由紀がやってきた。
「仕方ないよ…由紀は飼育小屋の掃除係なんだし…。」
と春香が言うと凛が
「私そろそろ帰らないと！またね！」
と言って去って行った。春香たちは凛に手を振り姿が見えなくなると
「そういえばさ…もうすぐだったよね…。」

と由紀が言った。
「なにかあったけ？」
と真奈美が聞くと由紀は少しあきれながら
「卒業式よ…凛さん六年生でしょ…。」
と言った。
「そういえばそうね…でも、全く会えなくなるわけじゃないし…。」
と真奈美が言うと由紀は
「それでもお兄ちゃん中学校に入ってから部活とかに入って帰りが遅くなったから…。」
と言った。
「そうなんだ…それじゃぁ今まで通りに遊べないのかな？」
と光が言うと真奈美が
「どちらにしても私たちはまだ卒業式に出られないからちゃんとお祝いしないとね…。」
と言った。

番外編８その頃の名端島（後編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回から新章に入る予定です。

これからもよろしくお願いします。

第４１話探偵団解散の危機（前編）

名端島　名端小学校　校庭
「もー！達也なんか知らない！」
とすみれが言うと達也は
「あーいいさ！俺もう探偵団も抜けてやる！」
と言ったするとすみれは
「絶交よ！絶交！」
と言って体育館の方へ走って行った。
「ちょっと黒川さん！コナンは達也の方よろしく！」
と言うと哀はすみれを追って体育館の方へと走って行った。
「おい…達也…いったい何があったんだよ…。」
とコナンが言うと達也は
「どうにもこうにもあいつが悪いに決まってる！コナンは関係ない！」
と言うと達也はその場を去って行った。

その頃…
名端島　名端小学校　体育館付近
「待って黒川さん…。」
と哀が息を切らしながら言うとすみれは
「何か用？」
と聞いた。
「浅川君とけんかしてたみたいだけど何があったの？」
と哀が聞くとすみれは
「達也が悪いのよ…。」
と言った。
「浅川君がどうかしたの？」
と哀が聞くとすみれは

「別に哀ちゃんには関係ないでしょ！」
と言ってふたたび走り出した。

名端島　名端小学校　２年１組
哀は教室に入ると先に戻っていたコナンに
「ねぇ…二人の喧嘩に理由何かわかった？」
と聞いた。
「いや…全然…すみれが悪いって言うだけで…。」
とコナンが言うと哀は
「私の方をそんな感じよ…。」
と言った。
「少し調べてみるか…。」
とコナンが言うと哀は
「そうね…まずはクラスの子たちに聞いてみましょう…。」
と言うと席を立った。

筒野春香
「えっ！すみれちゃんと達也君がけんか！意外ね…。」
と春香が言うと哀が
「意外ってどういうこと？」
聞くと春香は
「あの二人すみれが転校した日から仲がいいのよ…けんかしてるところなんて見たことないわ…。」
と言った。
「転校した日から仲がいいって二人はその前からの知り合いだったの？」
と哀が聞くと春香は
「よくわからないわ…。」
と答えた。

藤川龍城
「達也とすみれが？さぁ…俺はさっぱり…。」
と龍城が言うとコナンは
「そういえばすみれと達也ってすみれが転校する前から仲がいいって聞いたけど本当なのか？」
聞いた。
「あぁ…そういえばそうだな…あいつら前から知り合いだったかな？」
と龍城が言うと授業の始まりを告げるチャイムが鳴った。
「ありがとう！」
と言うとコナンは自分の席に戻った。

3時限目　算数
「えーこれがですね…」
というように山内先生が黒板に数字などを書きながら説明している。
「ねぇ…コナン…何かわかった？」
と哀が聞くとコナンは
「いや…全然…。」
と答えた。
「人のアラを探すのが得意なあなたが苦戦するなんて珍しいわね…。」
「どーゆう意味だよ…。」
「そのまんまよ…。」
と哀が答えるとコナンは
「そんなことより次の休み時間もいろいろ話を聞いたみるか…。」
とコナンが言うと哀は
「そうね…。」
と答えた。

第４１話探偵団解散の危機（前編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第４２話探偵団解散の危機（後編）

名端島　海岸沿いの道
「結局わからかったわね…。」
と哀が言うとコナンは
「そうだな…。」
と答えた。
「明日も調べてみましょう…。」
と哀が言うとコナンは
「でも、子供同しのけんかだし、明日になれば仲直りしてるかもよ？」
とコナンが言うと哀は
「そうだといいけど…。」
と答えた。

名端島　阿笠博士の家
家に帰ると
「お帰り！新ちゃん！哀ちゃん！」
と言いながら有希子が出てきた。
「母さん！？どうしてここにいるんだよ！」
とコナンが言うと有希子は
「実はね…ちょっと二人に話したあってきたんだけど…。」
と言った。哀が
「話ってなんですか？」
と聞くと有希子は
「まぁまぁこっち来て…。」
と言いながら奥に入って行った。

名端島　阿笠博士の家　居間

「それで…話ってなんだよ？」
とコナンが聞くと有希子は
「いきなりで悪いんだけど…二人ともアメリカに留学する気はない？」
と言った。
「アメリカ？なんでまた急に…。」
とコナンが言うと有希子は
「だって！小っちゃい新ちゃんかわいいんだもん！哀ちゃんだってかわいいわよ！」
と言った。哀が
「理由ってそれだけですか？」
と聞くと有希子は
「そうじゃなくて…阿笠博士が信用できないとかそういうのじゃないけど…やっぱり少し心配で…二人でならいいんじゃないの？」
と言った。
「少し考えさせてください…。」
と言うと哀は階段を上って行った。
「新ちゃん…私は一旦帰るけど、春休みが始まるぐらいに一旦アメリカに帰るけど返事をして頂戴…。」
と言うと有希子は帰った。

次の日…
名端島　名端小学校　３年１組
「昨日すみれと達也がけんか？」
と淳史が言うとコナンは
「そうなんだよ…何かしらねーか？」
と聞いた。
「もしかしたら…」
「なにか思い当たるのか？」
とコナンが聞くと淳史は

「俺はもうじき転校するんだけど…それでどう見送るかで二人が少しけんかしてるらしいって真奈美から聞いたけど…。」
と言った。
「そうなのか…ってお前転校するのか？」
とコナンが言うと淳史は
「そういえばお前らには話していなかったか…実は父さんの仕事の関係でこの島でやっている店も閉めて引っ越しすることになったんだ…。」
と言った。
「そうだったのか…とりあえず二人を何とか仲直りさせてくるから…ありがとう！」
と言うとコナンは2年1組の教室に向かった。

名端島　名端小学校　2年1組
　教室に入ると昨日はあんなにけんかしていた二人が仲良く話していた。
「あれ…二人とも喧嘩してたんじゃ…。」
とコナンが言うとすみれは
「あれね…実は淳史君の見送り方でけんかしてたんだけど…やっぱりちゃんとお別れ会した方がいいって思って…。」
と言った。すると哀は
「あら…あなたの言う通り子供のけんかはすぐに終わるものね…。」
と言い残しすみれに
「私たちもお別れ会行っていい？」
と聞いた。するとすみれは
「もちろん！場所と時間は…」
と説明を始めた。

第４２話探偵団解散の危機（後編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第４３話淳史のお別れ会

名端島　名端小学校　２年１組
「それじゃぁ！明日忘れずに来てね！」
と言うとすみれは家に帰って行った。
「ついに明日か…。」
とコナンが言うと哀は
「それにしても…結構急ぎの引っ越しなのね…後三週間で春休みなのに…。」
と言った。
「そうだな…。」
と答えるとコナンと哀は教室を出て家に向かって歩き出した。

名端島　海岸沿いの道
「それにしても…淳史ってどこに引っ越すんだ？」
とコナンが言うと哀は
「黒川さんが言うには東京らしいわよ…。」
と答えた。
「東京ね…。」
とコナンがつぶやくと哀は
「あの子たちのこと考えてるの？」
と聞いた。
「まぁな…。」
とコナンが答えると哀は
「それとも愛しのあの子の事かしら？」
と言った。
「バーロー…確かに気にならないわけでもないけどよ…。」
「まぁ…私もそうだけど…。」
と哀が言うとコナンは立ち止まり

「東京行った時も園子と元太しか見なかったしな…。」
と言った。
「だからと言ってホイホイ会いに行くわけにはいかないわね…貴方が何を考えたか知らないけどややこしいことになるかもしれないから…。」
と言うと哀は再び歩き出した。
「そうだな…。」
と言うとコナンも哀の後を追って歩き出した。

次の日…
名端島　すみれの家
「すみれ！来たぞ！」
とコナンが言うとすみれが
「もう！コナン君、哀ちゃん！遅いよ！」
と言った。
「誰かさんの寝坊のせいで遅れちゃったのよ…。」
と哀が言うとコナンは
「おめーの方が起きるの遅かっただろうが…。」
と言った。すると哀は
「そんなことより…早く始めましょう…。」
と言いながら家に入って行った。

名端島　すみれの家　居間
　すみれの家の入ると食卓であろうテーブルのところに達也と綾子、真奈美、淳史が座っていた。
「それじゃぁ始めようか！」
とすみれが言うと達也は
「そうだな…。」
と答えた。

お別れ会が終わるとみんなはそれぞれプレゼントや手紙を渡した。
「みんな本当にありがとうな！」
と淳史が言うと達也が
「とにかく、明日見送りに行くから！」
と言った。すると淳史は
「あぁ！それじゃぁまた明日な！」
と言った。

名端島　阿笠博士の家
「ところでさ…哀…お前、手紙になんて書いたんだ？」
とコナンが聞くと哀は
「あら…探偵さん…なんに調査かしら？」
と答えた。
「そんなんじゃねーよ…少し気になったから…。」
とコナンが言うと哀は
「あなたこそなんて書いたの？」
と聞いた。するとコナンは
「別に…普通に向こうに行ったら連絡よこせよ、とかそんな感じだよ…。」
と言った。
「おやすみ…明日早い時間の船を見送りに行くんだから今日みたいに寝坊しないでよ…。」
と言うと哀は階段を上って行った。
「まったく…俺も寝るか…。」
と言うとコナンも階段を上がって行った。

第４３話淳史のお別れ会（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第４４話さらば淳史

名端島　名端港
「いよいよお別れだな…。」
とコナンが言うと淳史は
「あぁ…短い間だったけど楽しかったよ…。」
と言った。
「また会おうな！」
と達也が言うと淳史は
「もちろんだ！ところで真奈美はどこに行ったんだ？」
と言った。
「そーいえばいないね…。」
とすみれが言うと船の汽笛が鳴った。
「もう行かないと！また会おうな！みんな！」
と言うと淳史は船の方へ走り出した。それから少しすると船はゆっくりと動き出した。
「みんなー！本当に今までありがとう！またなー！」
と言いながら淳史は手を振っていたがその途中で何かに気づいたように別の方向に手を振りだした。
「どっちに手を振ってるんだ？」
とコナンが言うと哀は周りを少し見渡してからクスッと笑って
「さぁ…どこかしらね…。」
と言った。
「コナン…帰るわよ…。」
と言うと哀は港に背を向けて歩き出した。
「ちょっと待てよ！哀！」
と言うとコナンはそれを追いかけた。
「行っちゃった…。」
と船が見えなくなった方を見ながらすみれが言うと達也は

「絶対また会えるよな…どこかで…。」
と言った。
「もちろんだよ！きっとどこかで…。」
と言うとすみれは
「私たちも帰ろうか…。」
と言って港を後にした。

名端島　海岸沿いの道
　夕日が赤く照らすこの道をコナンと哀は二人で歩いていた。
「ねぇ…コナン…これから少しさびしくなるわね…。」
と哀が言うとコナンは哀の手をさしだして
「大丈夫だろ…あいつらがいるし、俺もいるから…。」
と言った。すると哀はその手を取り
「そうね…。」
と答えた。
「ところで東君はちゃんと別れを言って出て行ったのに、私たちは何にも言わずに出て行ってどう思われたのかしら…。」
と哀が聞くとコナンは
「さぁな…でも、恨んだりはしないんじゃないか？」
と言った。
「そうね…でも、貴方の事件吸収体質が移って大変なんじゃないかなって…。」
と哀が言うとコナンは立ち止まり
「バーローたまたまだってあるだろ…そんなにしょっちゅう事件に巻き込まれるわけ…」
と言いかけたがそれを哀は
「だから…あなたがしょっちゅう巻き込まれていたんでしょ…。」
と言うとコナンは
「工藤新一の時はそれほどでもなかったぞ！」
と言った。

「でも、アメリカの時は飛行機に始まり立て続き事件に遭遇したって聞いたし、トロピカルランドでも事件が解決した後だって言うじゃない…。」
と哀が言うとコナンは
「それはたまたまだ…。」
と言うとコナンは再び歩き出した。

名端島　阿笠博士の家
「そうか…淳史君は行ってしもうたか…。」
と阿笠博士が言うとコナンは
「あぁ…東京だとさ…。」
と言った。すると阿笠博士は
「それじゃぁわしらと逆じゃな…。」
と言った。
「そうね…ところでどうする？コナン…。」
「何のことだよ？」
「アメリカ…。」
と哀が言うとコナンは
「そうだな…もう少し考えてみるか…。」
と言い残し階段を上って行った。

第４４話さらば淳史（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第４５話二人の答え

名端島　名端小学校　２年１組

修了式が終わった後クラスで通知表を受け取り先生の話を聞いていた。

「明日から春休みだ！事故やけががないようにして、３年生になる準備をしろよ！」

と山内先生が言うとクラスのみんなは

「はーい！」

と返事をしてあいさつをしてから教室をでた。

名端島　阿笠博士の家

コナンは電話を取るとあるところへ電話をした。呼び出し音の後

「もしもし…工藤ですが…。」

と電話口から声がした。

「俺だけど…。」

とコナンが言うと有希子は

「あっ！新ちゃん？電話してきたってことは留学の事返事が聞けるのかしら？」

と言った。

「そのことなんだけど…留学の話はなしでいいか？」

とコナンが聞いた。すると有希子は少し間を開けてから

「やっぱりそうなのね…別にいいわよ…新ちゃんがそういうなら…」

と言った後に

「そうそう！新ちゃん！聞いてくれる？」

と言った。

「なんだよ…。」

とコナンが聞くと有希子は

「優作ったらこの前ちょっと私が出かけてる時に…」

と何やら愚痴を言いだした。
「なんだよ…喧嘩でもしたのか？」
とコナンが聞くと有希子は
「そういうわけじゃないけどね！でもやっぱり…」
とふたたび話し出した。結局有希子が満足するまで話を聞いていたコナンは1時間以上受話器を握っていたのだった。

名端島　中央広場
「コナン！遅いぞ！」
と達也が言うとコナンは
「それはだな…」
と言い訳を始めようとしたがすみれが
「確かにいつもよりも遅いよね…。」
と言った。
「そんなことよりも…早くサッカーしようぜ！」
とコナンが言うと達也は
「そうだな！」
と言い手に持っていたサッカーボールを地面に置いた。
「よし！達也！そっちパス！」
とコナンがいいながら達也の方にボールをけったが横から来たすみれがボールを取って行った。
「しまった！」
と達也が言ったころにはすみれはシュートを決めいていた。
「早っ！」
とコナンが言うとすみれは
「すごいでしょ！」
と自慢げに言った。その後も優太や龍城もパスをしたりするのだがすみれがかなりサッカーが上手だったため圧倒的差で女の子チームが勝った。
「負けた…。」

とコナンが言うと哀は
「あなたがサッカーで負けるなんてね…すごいわね…あの子…。」
と言いながらすみれを見た。
「バーロー…小学生の女の子相手に本気でやるかよ…。」
とコナンが言うと哀はクスッと笑いながら
「それはどうかしら…私は先に帰るわね…。」
と言い残し中央広場を去って行った。

その頃…
名端島　名端港　船乗り場
瑠璃島からの船が到着すると乗客の中の一人の子連れの女性が
「ここが名端島ね…。」
とつぶやいた。
「ここで新しい友達増えるかな？」
と女性の横にいた女の子が言うと
「もちろんよ！あなたなら大丈夫！行くわよ！」
と女性が言うと女の子は
「うん！」
と言って女性と一緒に歩き出した。

第４５話二人の答え（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

最後の方に出てきた親子の名前は次章で登場します。

これからもよろしくお願いします。

番外編9桜の木の下で

名端島　名端小学校　体育館裏

卒業式を終えた凛は体育館裏の桜の前に立っていた。

「凛…どうしたの？」

と言いながら後ろから綾子が来ると凛は振り返って

「何でもないよ…少し友達の事思い出してさ…。」

と言った。

「友達の事？」

「そう…あれは私がまだ2年生だったころ…」

4年前…

名端島　名端小学校　2年2組

この時は島の人口は今より多かったが当時はまだ観光地として知られている現在と違って人が出ていく一方だった。

当時名端小学校は現在とは違い２０人の学級が二クラスずつ…６年生が３０人弱で2年生に至っては２０人弱しかいない現在の名端小学校より人が多かったのだ。凛がいた2年2組の担任だった秋波先生が

「みんな！今日は新しい友達を紹介するわよ！入ってきて！」

と言うと教室に女の子が入ってきた。

「初めまして…奥川咲（おくがわさき）と言います…。」

と言った。

「咲さんの席は凛さんの横ね…。」

と秋波先生が言うと咲は凛の横の席に座り

「よろしく！」

と言った。

「それから私たちはとても仲良くなってね…毎日のように遊んでた

んだ…。」
と凛が言うと綾子が
「そうなんだ…凛って私以外に友達いたんだね…。」
と言った。
「綾子…今少しひどいこと言ったよね…。」
「ごめん…そんなことよりその友達はどうなったの？今この学校にはいないみたいだけど…。」
と綾子が言うと凛は
「確かにね…咲が転校したのが今からちょうど3年前だったかな…」

3年前…
名端島　名端小学校　体育館裏
　体育館裏に咲いている桜の木の前に咲と休みにもかかわらず突然来た電話で呼び出された凛が立っていた。
「咲…転校するって本当？」
と凛が聞くと咲は
「そうなの…お父さんの仕事の都合で今度大阪に引っ越すことになったの…。」
と言った。
「そうなんだ…。」
と凛が言うと咲は
「それでね！凛、この場所にタイムカプセル埋めて二人で卒業式の日に掘らない？私頑張ってそっちの卒業式の時に来るからさ…。」
と言った。すると凛は
「うん！約束だよ！絶対来てね！」
と言うと咲は
「もちろん！絶対ね！」
と言った。
　それから二人はいろんなものを入れてタイムカプセルを埋めた。

現在
名端島　名端小学校　体育館裏
「なるほどね…ってゆうかタイムカプセルって普通は卒業式の時とかじゃなくて「３０年後の自分へ」とかそういうのじゃないの？」
と綾子が言うと凛は
「それはそうだけど…とにかく約束したんだからここで待ってるのよ…咲を…。」
と言った。綾子が
「そんなこと言ったって大阪から名端島（ここ）って結構遠いよ…いくらなんでも…」
と言いかけると綾子の視界に凛以外の女の子が入った。
「どうしたの？綾子…。」
と言いながら凛が振り返ると
「咲…。」
そこに立っていたのは紛れもなく咲だった。
「咲！久しぶり！」
と凛が言うと咲は
「凛ちゃん！ちゃんと約束憶えてたんだ！」
と言いながら凛の方へ駆け寄って行った。
「じゃましちゃいけないのかな？」
とつぶやくと綾子はその場を去って行った。

番外編9桜の木の下で（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

番外編１０真奈美思い出の場所

名端島　名端港付近
「行っちゃった…。」
と淳史を乗せた船が見えなくなると港を見下ろすことができる小高い丘の上にいた真奈美がつぶやいた。
「真奈美！やっぱりここにいたの？」
と言いながら母が近づいてくると真奈美は
「うん…あの事思い出してね…。」
と答えた。

2年前…
名端島　名端港付近
　当時まだ小学1年生だった真奈美はここから名端島に出入りする船を眺めるのが日課だった。
（今日は船来るの遅いな？どうしたんだろ？）
と思っていると後ろから
「今日は向こうの港が台風の影響で波が高いから船は来ないよ…。」
と言う声がした。真奈美が振り向くとそこには淳史が立っていた。
「淳史君？」
と真奈美が言うと淳史は
「真奈美っていつもここで船を眺めてるけど友達と遊んだりしないの？」
と聞いた。すると真奈美は
「私はここで船が動くのを見てるのが好きだからいい…。」
と答えた。
「そうなの？遊びたくなったら中央広場まで来てよ！仲間に入れてあげるから！」
と言い残すと淳史は去って行った。

次の日もまた次の日も真奈美は船を眺めていた。そうして船を眺めているとそのうち淳史が来るようになりそのうち一緒に船を眺めていた。そんな日々が毎日続くようになっていた。

1か月後…

名端島　名端小学校

真奈美が帰りの支度をして廊下を歩いていると後ろから淳史が

「真奈美！今日も船を見に行くのか？」

と聞いてきた。真奈美が振り返って

「なんで淳史君っていつも私と一緒に船を見てるの？他の友達もたくさんいるのに？」

と聞いた。すると淳史は

「だって真奈美いつも一人で友達いないのかな？って思って…だったら友達になろうかなって思っただけだよ…真奈美だったらきっと中央広場まで遊びに行っても友達たくさんできるよ！」

と答えた。真奈美は

「そうなの…ありがとう…それじゃぁ今日は中央広場に行ってみようかな…学校から帰ったら迎えに来てね…。」

と言うと家に帰り淳史を待った。

その後迎えに来た淳史と共に中央広場に向かった。

名端島　中央広場

中央広場に行くと同級生だけではなく上級生や幼稚園児などがいた真奈美が中央広場に入ると同級生だけではなく上級生も混ぜて鬼ごっこをした。

日が暮れる頃…

名端島　名端通り

「なかなか楽しかっただろ？」
と淳史が聞くと真奈美は
「うん！とっても！」
と答えた。
「また明日もあそこに遊びに行こう！じゃぁな！真奈美、また明日！」
と言うと淳史は角を曲がって行った。

　それから真奈美は毎日のように中央広場で遊びたくさんの友達ができた。

現在…
名端島　名端港付近
「母さんは先に帰ってるわね…。」
と言いながら母が去るとその十分後ぐらい後にコナンを先に帰らせた哀がやって来た。
「なかなかいい場所ね…港が見渡せて…。」
と哀が言うと真奈美は
「そうでしょ…ここ、淳史君との思い出の場所なの…。」
と言った。哀は
「そうなの…。」
と短く答えると真奈美と一緒に日が傾き始めるまで港を眺めていた。

番外編１０真奈美思い出の場所（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回から新章に入る予定です。

これからもよろしくお願いします。

第４６話新しい仲間

名端島　名端小学校　３年１組
「さて！みなさん！今日から新学期よ！この３年１組の担任は、さっき始業式で発表されたように私、生野真美（まみ）です！皆さんよろしくお願いします。さっそくだけど転校生を紹介わ広川（ひろがわ）香菜絵（かなえ）さんよ…。」
と生野先生が言うと教室のドアが開いて一人の女の子が入ってきた。
「初めまして！広川香菜絵いいます！みんなよろしゅう！」
と言った。すると生野先生が
「香菜絵さんの席は…達也君の横空いてるわね！そこに座って！」
と言った。香菜絵は達也の横に座ると
「よろしくな！達也君！」
と言った。
「今日転校してきたのは香菜絵さん以外にも１年生と５年生にそれぞれいるからみんな仲良くしてね！これで今日は終わり！みんな！寄り道せずにまっすぐ帰ってね！」
と生野先生が言うとみんなは席を立ってそれぞれの家に向けて歩き出した。

名端小学校　廊下
　コナンと哀、すみれ、達也は少し早足で歩いて香菜絵に追いつくと
「香菜絵ちゃんってどこから引っ越してきたの？」
とすみれが聞いた。
「大阪や！なかなかえぇとこやで！そやそや、今度大阪行くとき一緒にいかへんか？私の友達紹介したるで！」
と香菜絵が言うと達也が
「大阪か…結構遠いところから来たんだな…。」
と言った。するとすみれが

「そうだ！香菜絵ちゃん！私たち少年探偵団やってるんだけど香菜絵ちゃんもどう？」
と聞いた。すると香菜絵は
「ええよ！私大阪でも少年探偵団やってたし！」
と答えた。
「大阪にも探偵団があるのか？」
とコナンが聞くと香菜絵は
「せやで！そうや！今度探偵団のみんなと師匠に会いに行ったらどうや？」
と言った。
「師匠がいるの？」
とすみれが聞くと香菜絵は
「そうそう！私あの浪速の高校生探偵服部平次の弟子なんやで！」
と胸を張って答えたが平次の事をよく知っているコナンと哀は
（はは…あいつの弟子かよ…。）
（あの色黒探偵に弟子なんていたのね…。）
と考えていた。それはともかく達也とすみれは平次の事を知らないのか特に反応を示さない。
「みんなどないしたの？」
香菜絵が聞くとすみれは
（服部平次って誰？）
と思いながら
「なんでもないよ！とにかく学校から帰ったら中央広場に集合ね！」
と言って達也と共に去って行った。二人が言った後コナンと哀が家に帰ろうとすると香菜絵が
「二人ともちょっと待ってくれへんか？」
と言った。コナンが
「どうしたんだよ？香菜絵ちゃん…。」
と聞くと香菜絵が
「中央広場ってどこなん？この島に越してきたばかりでよくわから

んのや…。」
と言った。すると哀が
「だったら広川さん…学校から帰ったら校門の前で待ってってくれる？一緒に行きましょう…。」
と言った。すると香菜絵は
「分かった！ほなまたあとでな！」
と言うと帰って行った。

第４６話新しい仲間（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第47話現れる二人の転校生

名端島　名端小学校　校門
香菜絵が校門の前にいると
「おーい！香菜絵！」
という声がした香菜絵が振り向くとコナンと哀が歩いてきていた。
「コナン君に灰原さん！早く中央広場に行かな遅くなってしまうで！」
と香菜絵が言うとコナンは
「もうそんな時間か！急がねーと！」
と言うと三人は中央広場の方に駆けだした。

名端島　中央広場
「やっときたか！三人とも！」
と達也が言うと香菜絵が
「あの二人が遅いせいで遅くなってしもうたんや…。」
と言った。するとすみれは
「コナン君が遅いのはいつものことだし…さっき1年生と5年生の転校生がいたから一緒に遊ぼう！」
と言いながら男の子と女の子を連れてきた。
「初めまして…5年生の鈴山桃子（すずやま ももこ）です…。」
と女の子が言うと男の子が
「俺は下川隼人（しもかわ はやと）だ！よろしく！」
と言った。するとコナンと哀、香菜絵の三人は
「江戸川コナンだ！よろしく！」
「灰原哀よ…。」
「広川香菜絵や！二人ともよろしゅうな！」
とそれぞれ自己紹介した。
「それじゃぁ！早速だけどかくれんぼしよう！」

とじゃんけんをして哀とすみれが鬼をすることになった。

江戸川コナン
「さーて…どこに隠れるかな…。」
と言いながら歩いているとサッカーボールが視界に入った。
「サッカーボールか…。」
とつぶやくとコナンは近くの壁に向かってサッカーボールをけり始めた。

浅川達也
「俺はここに隠れよ！香菜絵も早く隠れろよ！」
と言い草むらの中に入った。

広川香菜絵
「どないしよう…。」
と言いながら周りを見渡すとちょうどいい隠れ場所が見つかった。
「ここならええやん！」
と言い香菜絵はそこの隠れた。

鈴山桃子・下川隼人
「えっと…ここに隠れよ！」
と言いながら遊具の陰に入ると隼人が
「俺も入れて！」
と言いながら入ってきた。
「別にいいわよ…。」
と桃子が言うと隼人は
「ありがと！」
と言った。

灰原哀

「…９９、１００！」
とすみれが数え終わると哀は
「黒川さんは左をお願い…私は右の方探すから…。」
と言い右の方へ歩いて行った。
少し歩くと壁に向かってサッカーボールをけっているコナンが視界に入った。
「あなた…かくれんぼしている自覚あるの？」
と哀が聞くとコナンはサッカーボールをけるのをやめて
「あっ」
と言った。すると哀は
「あなたね…とりあえずコナンみっけ…。」
と言った。

名端島　中央広場
「さて！香菜絵ちゃんも見つけたし！これで全員見つけられた！」
とすみれが言うとコナンは
「結構手ごわいな…。」
と言った。すると哀は
「あなたはサッカーボール蹴ってただけでしょ…。」
と言った。
「とりあえず制限時間の３０分より前に全員見つかったからすみれさんと灰原さんの勝ちね…。」
と桃子言うとコナンが
「って言っても哀が見つけたのは俺だけで残りの四人はすみれが見つけたんだけどな…。」
と言った。すると哀は
「どっちにしても私たちが勝ったのには変わらないわよ…。」
と言った。

そのあと日が傾き始めるまでかくれんぼをやったが誰もすみれに

は勝てなかった。

第４７話現れる二人の転校生（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第４８話花見をするなら梅桜島（前編）

名端島　名端小学校　３年１組
「おはよう！哀ちゃん！コナン君！」
と言いながらすみれが近づいてくると二人は
「おはよう…。」
「おはよう！すみれ！」
とそれぞれあいさつを返した。
「ところでさ…今度香菜絵ちゃんも誘って梅桜島まで花見に行きたいと思ってるんだけど今度の土曜日空いてる？」
とすみれが聞くと哀が
「別に…大丈夫よ…。」
と答えた。
「そう！だったら香菜絵ちゃん誘ってくるね！」
と言うとすみれは香菜絵の方へ行った。
「花見か…。」
とコナンが言うと哀は
「ところで…場所取りはだれがするのかしら…梅桜島は四季色列島の中では有名な桜の名所らしいし…人も相当来るはずよ…。」
と疑問を口にした。するとコナンは
「行けばわかるんじゃねーか？」
と言った。
「それもそうね…。」
と答えると哀は自分の席に戻った。

名端島　名端小学校　３年１組
　授業が終わりコナンと哀の二人が帰り支度をしていると
「コナン君！哀ちゃん！」
と言いながらすみれが近づいてきた。

「どうかしたの？黒川さん…。」
と哀が聞くとすみれは
「今度のお花見の話なんだけど…達也と香菜絵は来れるって言ってるんだけど明が用事があるらしくて…阿笠博士誘ってくれる？」
と言った。
「別にいいわよ…。」
と答えるとすみれは
「わかった！よろしくね！」
と言うと去って行った。
「今回は阿笠博士も一緒か…。」
とコナンが言うと哀は
「いいんじゃない？阿笠博士いろいろ留守番の時が多いし…。」
と言った。するとコナンは
「そうだな…花見は大勢の方が楽しいし…。」
と言った。
「それにしても…さすがに今回は山内先生は誘わないみたいね…。」
と哀が言うとコナンは
「そうだな…別にもう担任でもないからな…。」
と言った。
「まぁいいわ…そろそろ帰りましょう…。」
と言うと哀はランドセルを背負って教室を出た。

四季色列島　梅桜(うめざくら)島
　周囲１０キロほどの島で人が住んでいる島では四季色列島の中で一番小さい島。人口は約５００人。この島は名前の通り梅と桜の名所として知られている。春のお花見シーズンには四季色列島の各島や名端島からたくさんの観光客が訪れる。

四季色列島　梅桜島　西桜(にしざくら)港
「やっと着いた！」

と言いながらすみれが船から降りるとそれに続いてコナン、哀、達也、香菜絵、すみれの母、阿笠博士が船から降りてきた。
「ここが梅桜島かいな！」
と香菜絵が言うと達也が
「あぁ…梅桜島は桜の名所として有名なんだ！山内先生と生野先生が場所取りしてるはずだから早く行こうぜ！」
と言った。するとすみれは
「そうだね！」
と言い達也と香菜絵、すみれの三人で歩きだした。
「まったく…先生に場所取り頼むなんて相変わらずね…黒川さん…。」
と哀が言うとコナンは
「そうだな…。」
と答えた。
「早く行かないとと見失ってしまうぞ…。」
と阿笠博士が言いながら歩き出すとコナンと哀、すみれの母は三人を追って歩き出した。

第４８話花見をするなら梅桜島（前編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第４９話花見をするなら梅桜島（後編）

四季色列島　梅桜島　桜公園
「すごーい！」
とすみれが言うとコナンは
「ほんとうだな…。」
と言った。すると達也が
「それよりも早く先生たちけようぜ！」
と言いながら歩き出した。

四季色列島　梅桜島　桜公園　中央噴水前
　コナンと哀、すみれ、達也、香菜絵、阿笠博士、すみれの母の七人が歩いていると
「おーい！みんな！こっちだぞ！」
という声がした。声がした方を向くと山内先生が手を振っていた。
「山内先生！」
と言いながらすみれがそっちの方へ行くとコナンたちもそれに続いた。
「先生たちがとっておいた場所はちょっと向こうの方だ。あとほかの先生方にあったから今から一緒に花見をするところだ！」
と言った。
「ほかの先生方もいるんですか？」
とすみれの母が聞くと山内先生は
「はい！それではこっちの方です！」
と言いながら歩き出した。

四季色列島　梅桜島　桜公園　西の並木道
　コナンたちが山内先生について歩いていくと並木道の脇で生野先生や葛原先生、柏原先生、日渡先生、氷川教頭、保険の先生である

新川愛由(しんかわ あゆ)先生さらには岡垣校長など名端小学校の職員が集まって花見をしていた。
「おー！来たか！」
と氷川教頭が言うと山内先生は
「はい…けっこう探すのに苦労したんですよ…。」
と言った。
「とにかく全員そろったわけだし…始めるか！いいですよね？校長…。」
と氷川教頭が言うと岡垣校長は
「はい…みんな！今日は無礼講よ！」
と言った。するとすみれが
「無礼講ってなんですか？」
と聞いた。日渡先生が
「無礼講ってのは先生とか校長とかそういうの関係なしでいいってことだよ…。」
と言った。すると香菜絵が
「そうなん！じゃぁ先生を酒瓶で殴ったり…」
と言いかけると岡垣校長が
「無礼講だけど節度をわきまえ人を殴ったりとかそういうことをしないように！」
と言った。すると
「すみれたちじゃないの！」
と言いながら綾子が凛や真奈美と一緒にやってきた。
「お姉ちゃん！」
とすみれが言うと綾子は
「なに…母さんやすみれもここだったわけ…。」
と言うと岡垣校長が
「どう？あなた達も一緒に…今日は無礼講だから…。」
と言った。すると綾子は
「本当！だったら気に入らない教師を酒瓶で…」

と言いかけたが岡垣校長が
「ただし！節度をわきまえるように！」
と言った。

そのあともここが桜の名所であるせいか、様々な人がやってきていつの間にか大宴会になっていた。

名端島　阿笠博士の家
花見を適当なところで切り上げてきたコナンと哀は居間で紅茶を飲んでいた。ちなみに阿笠博士はいまだ先生方といるらしくまだ帰ってきてない。
「すごかったわね…。」
と哀が言うとコナンは
「だけども楽しかったからいいんじゃねーか…。」
と答えた。すると哀は
「それにしても…博士ったら…私の目が届かないからって勝手にメタボってるのかしら…。」
と言った。コナンが
「たまにはいいんじゃねーか…せっかくの花見だし…。」
と言うと哀は
「…明日先生方に博士が何食べてたか聞いてみようかしら…コナン…おやすみ…。」
と言い残し階段を上って行った。

第４９話花見をするなら梅桜島（後編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第５０話名端島の桜

名端小学校　３年１組
「この前のお花見楽しかったね！」
とすみれが言うと香菜絵は
「ほんまやなーメッチャ楽しかったで！」
と答えた。
「そうだ！この学校の桜も満開だから私たちだけでお花見しようか！」
とすみれが言うと哀は
「この学校に桜なんてあったかしら？」
と言った。するとすみれは
「あるよ！お姉ちゃんが体育館裏にね大きな桜の木があるって言ってたよ！」
と言った。
「えぇやないか！コナン君や達也君誘っていこうや！」
と香菜絵が言うとすみれは
「それじゃぁコナン君と達也誘ってくる！」
と言って二人の方へ向かった。

名端島　名端小学校　体育館裏
　コナンと哀、すみれ、達也、香菜絵が体育館裏に来るとそこには一本の桜の木があり桜が満開だった。
「きれいね…。」
と哀がつぶやくとすみれは
「そうでしょ！」
と答えるとどこからかブルーシートを持ってきて広げた。
「梅桜島の桜もえぇけどここも最高やな！」
と香菜絵が言うと達也が

「そうだな！それにしても知らなかったな…こんなところに桜があるなんて…。」
と言うと後ろから
「やっぱりここにいた！」
と言いながら真奈美が現れた。
「あら…久坂さん…。」
と哀がつぶやくと真奈美は
「まったく…ここに来るなら誘ってよ…。」
と言った。
「ごめん…。」
とすみれが言うと真奈美は
「いいわよ…一緒にお花見しましょう…。」
と言ってブルーシートに座った。
「それにしてもよくこんなところ見つけたな！お前のお姉さん！」
と達也が言うとすみれは
「そうよね…凛さんを追いかけてて体育館裏まで来たらあったんだって…。」
と言った。
「凛さんがねー。」
とコナンがつぶやくと香菜絵が
「凛さんって誰や？それにすみれちゃんお姉さんおったん？」
と聞いた。するとすみれは
「凛さんって言うのは私のお姉ちゃんと同級生で今名端中学校に通ってる人だよ！」
と答えた。すると香菜絵は
「なるほどな…。」
と言った。すると真奈美が
「そういえば凛さんの話で思い出したけど私ちゃんと自己紹介してなかったね！私は久坂真奈美！よろしくね！」
と言った。

「私は広川香菜絵や！よろしく！」
と自己紹介した。
「香菜絵ちゃんはどこから来たのの？」
と真奈美が聞くと香菜絵は
「大阪や！私あの浪速の高校生探偵服部平次の弟子なんやで！」
と自慢げに答えた。すると真奈美は
（大阪か…淳史君元気にしてるかな…っていうか服部平次って聞いたことないけどこんなけ胸張った言うってことはすごい人なんかな？）
と考えながら
「すごいね！探偵の弟子なんて！」
と言った。
「そうやろ！やっぱり修行は大事やからな！」
と香菜絵が言い真奈美と香菜絵は二人で盛り上がっていた。
「結構気が合うのかしら…あの二人…。」
と哀がつぶやくとコナンは
「どちらかというと真奈美ちゃんが香菜絵の話に頑張って合わせてるって感じじゃねーか…。」
と答えた。すると哀は
「そうね…。」
と答えた。

その日の夜、先生方から聞いた情報から阿笠博士がかなりの量の肉類を食べているのが発覚し、阿笠博士は哀に長々と説教されたのであった

第５０話名端島の桜（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

番外編１１淳史からの電話

名端島　真奈美の家

真奈美が自分の部屋で宿題をしていると下から母が

「真奈美！淳史君から電話よ！」

と声をかけた。

「本当！」

と言うと真奈美は階段を下りて母から電話を受け取った。

「もしもし！」

と真奈美が言うと淳史は

「もしもし！真奈美か？」

と言った。

「そうだよ！」

と真奈美が答えると淳史は

「真奈美…元気だったか？」

と聞いた。

「うん！３年生に転校性が来てね！その子が大阪出身らしいんだけどすんごく面白いんだ！淳史君はどうなの？」

と言った。すると淳史は

「俺も元気にしてるよ…こっちでも友達出来たし、それにこっちの小学校にも少年探偵団があってな！入ったんだけど、探偵団のみんな服部平次とかいう探偵の弟子でな俺も弟子入りしたんだ！」

と答えた。

「へぇーそういえば…。」

と真奈美が言うと淳史は

「どうかしたのか？」

と聞いた。すると真奈美は

「そういえば転校してきた子…広川香菜絵って言うんだけど…確かその子も大阪で探偵団やってて服部平次の弟子だったような…。」

と言った。
「広川香菜絵…そういえばあいつがそんな子がいたって言ってたような…。」
と淳史が言うと真奈美は
「あの子って？」
と聞いた。すると淳史は
「探偵団の奴だよ…名前は…えっと…よし…なんだっけ…。」
と答えた。すると真奈美は少しあきれたように
「探偵団の仲間の名前も忘れたの…。」
と言った。
「あはははは…とにかく俺が今いるのは大阪の改方学園って高校の近くにある小学校だから！じゃぁね！」
と言うと淳史は電話を切った。

次の日…
名端島　名端小学校　校門
　真奈美は香菜絵を見つけると
「香菜絵ちゃん！」
と話しかけた。すると香菜絵は
「どうかしたの？」
と聞いた。
「大阪の改方学園の近くの小学校って知ってる？」
と聞くと香菜絵は
「知ってるよ！私、そこで探偵団やってたんや！」
と答えた。
「それじゃぁ…淳史が入った探偵団って…香菜絵ちゃんがもともと入ってた探偵団なの！」
と真奈美が言うと香菜絵は
「淳史…そうや！東淳史やろ！確かに私が転校する前に来たで！」
と言った。

「やっぱりそうなんだ…それってどんな感じの探偵団なの？その…淳史君があまりはっきり言わないからさ…。」
と真奈美が言うと香菜絵は
「そうやな…まずメンバーはあだ名で呼び合っててな本名すら知らんやつとかおんねん！それでな…メンバーやけど私以外に…淳史の前に入って東京者やのに私がいない時はよー探偵団しきっとたウサギちゃんやろ…それにお好み焼きが好きなお好み…それから…せやせや！後は時計と天才や！」
と言った。香菜絵が
「いや…その…あだ名とかじゃなくて…本名とかは？」
と聞いた。すると香菜絵は
「さぁ…淳史君以外忘れてしもうた…とりあえずうちらの探偵団は師匠の指導の下大阪で事件を解決してるんや！まぁ…ウサギちゃんは大阪以外でも活躍しとるねんけどな…。」
と答えた。真奈美は
（本名知らんってどんな探偵団よ…。）
と思いながら
「すごいんだね…大阪の探偵団…。」
と言った。
「私もう家帰るで！」
と言うと香菜絵は帰って行った。

番外編１１淳史からの電話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

番外編１２お花見その後…

梅桜島　桜通り　居酒屋
「いやーしかし…。」
と阿笠博士が言うと岡垣校長は
「何でこうなるんでしょうか？」
と言った。

さて、話はお花見が終了した直後にさかのぼる。

梅桜島　桜公園　入口
「それではすみれさん！コナン君！灰原さん！また学校で！それでは黒川さん…名端島までよろしくお願いします…。」
と生野先生が言うとすみれの母は
「はい！それでは先生方もこの後楽しんでくださいね！」
と言いすみれとコナン、哀を連れて船に乗るため港へ向かった。ついでに綾子たちはすでに帰っている。
「さてと…。」
と生野先生が言うと氷川教頭が
「ちゃんとこの島にある居酒屋を予約してますんで！行きましょう！」
と言った。

梅桜島　桜通り　居酒屋
「なかなかいい雰囲気の店ですな！」
と阿笠博士が言うと氷川教頭は
「そうでしょ！毎年ここなんですよ！」
と言った。
「今年はあんまり飲みすぎないでくださいよ…。」

と岡垣校長が言うと氷川教頭は
「大丈夫ですよ！何度も同じ失敗は踏みません！」
と答えた。
「ならいいんですけど…。」
と岡垣校長は心配そうに言った。

そして現在に至る
「どうしますか？」
と岡垣校長が聞くと阿笠博士は
「私に聞かれましても…。」
と答えた。
「とりあえず近くにだれか先生の家は？」
と阿笠博士が聞くと岡垣校長は
「今年もあそこかな…。」
とつぶやいた。
「あそこと言いますと？」
と阿笠博士が聞くと岡垣校長は
「名端小学校の元教員の秋波先生が近くに住んでいるもので…。」
と答えた。

梅桜島　東堀（ひがしぼり）家
　岡垣校長が家のチャイムを鳴らすと女性が出てきて
「あら…岡垣校長…ということは今年もですか？」
と聞いた。岡垣校長は
「えぇ…すいません…。」
と答えた。
「お気になさらないでください…別に私はみなさんの顔が見れるわけですから…。」
とその女性が言うと岡垣校長が
「そうそう…阿笠さん…この人が名端小学校の元教師の秋波先生こ

と東堀舞先生です…ちなみにこの秋波先生が結婚して退職されてから代わりに来たのが山内先生なんです…。」
と紹介した。
「そうですか！わしは発明家の阿笠です！よろしくお願いします！」
と阿笠博士が自己紹介すると秋波先生は
「そうなんですか…それではあなたの発明品についていろいろ聞きたいのですが？」
と聞いた。阿笠博士が
「もちろんいいですよ！」
と答えると秋波先生は
「今日は親戚の子も遊びに来ているんで話を聞かせてあげてください…優斗（ゆうと）君！博士にあいさつしなさい！」
と言った。すると奥の方から男の子が出てきて
「初めまして！中村（なかむら）優斗いいます！よろしく！」
とあいさつをした。
「優斗君か！わしは阿笠博士じゃ！それではわしの発明品を紹介しようかの…。」
と言うと阿笠博士は奥で秋波先生と優斗に様々な発明品を紹介しだした。

番外編１２お花見その後…（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回から新章に入る予定です。

これからもよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0557u/

遠い町へ

2011年10月13日10時53分発行